



THE DAY OTHER

ふたみ

UnOfficial  
Dojin-Shi

YUKIRIN  
武藤礼恵





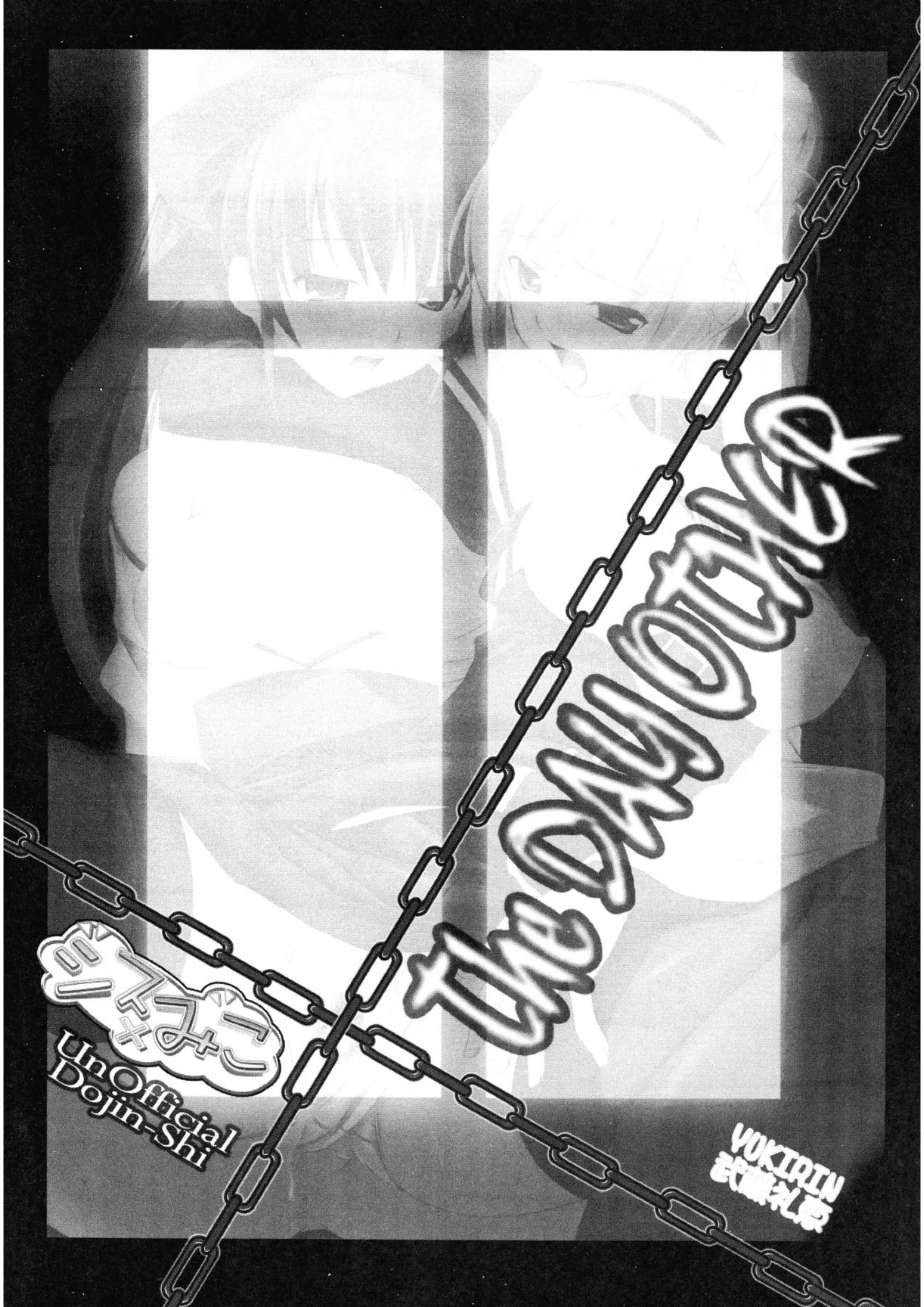
# THE DAY OTHER



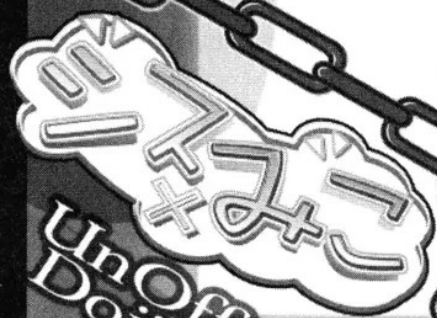
UnOfficial  
Dojin-Shi

YUKIRIN  
武藤礼恵





# THE DAY OTHER



UnOfficial  
Dojin-Shi

YUKIRIN  
武蔵礼堂

お兄様は、私を選んだ。  
私——此花美奈斗を。

私は、それに応える。

お兄様の命じることであれば、  
何だって、応える。

優しいお兄様。

大好きなお兄様。

死ねと言われれば……今なら死ねる。  
殺せと言われれば……今なら殺せる。

でも、優しいお兄様は絶対にそんなことを言わないし、命じない。  
だって、本当に優しいから。

ちよつと困った癖があるけれど、それが無かったら、私とお兄様の関係はこんな風に深くならなかったと思う。  
だから、この困った癖があつて本当に良かったと思つてゐるの。

「ねえ……お兄様あ♥」  
「美奈斗……んー、可愛いなあつ」

「やんつ♥ お兄様あ……エッチい♥」  
「エッチつて、いつも通り普通に言つていただけじゃないか」

「だ、だつてえ……そ、そのお……や、やつぱりい、め、面と向かつて言われるのは……」  
「恥ずかしい？」

「……んもお、そ、そういうのを聞くの、間違つていますよつ！」

ちよつと恥ずかしくて、怒つてみる。

そうすると苦笑いしながら、お兄様は……私の身体を触ってくるの。

「そうそう。美奈斗は、やつぱりそうやってツンつて、すまして見せたり、怒つたりしない」と

「え……じゃ、じゃあ、その、す、素直なのは……だ、ダメですかあ……」

「あ、い、いや……そういうことじゃなくて、うーん……難しいなあ。俺の好みを伝えるっていうのは……なあつ」

そう言いながら、私の身体に……やつと手を伸ばしてききました。  
ああ……そうそう。こういうのが……好きい♥

「やつ！だ、ダメですよつ……ま、まだあ……礼拝時間なんですからあつ！」

そうです。

私は、シスター。

もつとも、見習です。

今の学校を卒業したら、お兄様と一緒にヨーロッパに行くことになると思います。

国内よりも、海外の学校で、ちゃんとした資格を取つて、私もお兄様のパートナーがつとまるような立派なシスターになりたいのです。

「いいじゃないか。どうせ、教会の方には人が来ないんだからさあ」  
「そ、そんなこと言つて……この間大変な目に遭つたの忘れちゃつたんですか！」

礼拝時間に……私とお兄様は、つい調子に乗つて……エッチを始めちゃつて……結構、ハードに始めたところに、私と同じ学校の生徒がやつてきたの。

その娘は、その……悩みがあつて神父であるお兄様に戒告していたわけだけれど。  
「何だよ……そんなにこの間の困つたのか？」  
「こ、困りますよおつ！だ、だつてえ……」

その娘の話は……何だか、昔のお兄様と私の関係みたいで……その、え、エッチするんだけれど、それだけじゃすまなくて……もつともつと恥ずかしいことさせられちゃうつて。

その挙げ句、その娘のライバルっていうのが、幼馴染みっていう関係で、できれば、そのライバルとも仲悪くなりたくないとか。

ホント、どつかで聞いた話なのよねえ。  
「だ、だつてえ……そんな真面目な話なのに、お兄様ったら、わ、私とお、え、エッチ……しようとするんだもんつ」

そう。  
懺悔室の向こう。

懺悔室の向こう。

畏まったお兄様の顔の向こう側で……お兄様は、私のお尻を撫で回していました。いつもの通りです。でも、質問者は真剣です。そんな真剣な女の子の悩みを「ふんふん」とか「ほんほん」とか……如

何にかしこまつて聞いてますよー、つていう態度は、私としては全然感心しません。

「いいじゃないか。それよりも、美奈斗は困らなかつたの？せつかくいい具合に気持ちよくなつていたのに」  
「わ、私は……が、我慢できましたから、い、いいですう」

「嘘ばかり。その後、俺がどれだけすごい目に遭つたか分かつてない」

「やつ！だ、だつてえ……そ、それはあ、その……その……あの……お、お兄様のお努めじゃありませんか！」

そうです。  
あんなのは夫婦の営みの一部です。  
た、確かに、ふたりとも学校を遅刻するぐらい楽しく交つたのは事実ですし、それを姉さんに——美咲姉さんに宥められたのも確かです。  
でも、それは私とお兄様の問題で。

「いやあ、それはどうかな？俺には美奈斗だけの問題だと思つぞ」  
「お、お兄様あつ！だ、だつて、始めたのは、お兄様で」

「覚えてないかい。確かに俺のせいだったたら、ハイハイ、つて言つているところだけれど……さすがに全力で俺のせいじゃないからなあ」

「そ、そんなのお……わ、私のせいだとしても？」  
「思い出せない？」

「はい。私のせいじゃありません」  
「んじゃ、ビデオ見るか？」

お兄様は、携帯音楽プレイヤーを取り出します。最近のお兄様のこういうアイテム（姉さん曰く「サイバーガジェット」というらしいのですが、私にはちんぷんかんぷんです）は、色々あつて……そして、私を確実に困らせるのです。

「ほれ……これがそれ」

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

「ねえ、お兄様」  
「ん？何だ、美奈斗ー」



お兄様は聖書を読んでいる。  
日曜日の説教のための予行だ。若い神父さんが来たという噂のせいで、最近妙に説教を聞きに来る人が増えているので、一生懸命なのだ。  
でも、私はその原因を知っている。だから、これ以上、お母さんを必要以上、街に行かせるのを止めさせない。

「お忙しいでしょうけれどお、その……わ、私のお話も聞いてくださりませんか？」  
「でもさ、明日の夜とさ、日曜日の二回やるからさあ、同じ話は苦が無いだろう？」  
「神の言葉ですから、苦が無いとか何とかってあり得ない話ですよ」

「そうなのだ。解釈論の問題なら、同じ話でいいはずなのだ。」  
でも、お兄様は一生懸命。  
だから……私は好きになった。

「でも、それはそれ。これはこれですわ。さ、最近……その……し、してませんよねえ」  
「何を？ 夜のお勤めはしてるじゃないか」  
「そ、それはそうですけどお、お、昔みたいに……そのね、姉さんとお、お、お兄様を取り合いたいって頃みたいな」  
「取り合っていた頃ねえ」

ほんの二ヶ月前まで、私は実の姉さんとお兄様を取り合っていました。その頃は、協定を結んだ戦争みたいな、お兄様をどれだけ誘惑できるか……みたいなことをしていた。

「要するに、久々にここでエッチしたくなった、でOK？」  
「そ、そんな……ストレートに」  
「ストレートもへったくれもないじゃん。結局するんだから」  
「で、でも、その……お、お母さんとの約束」  
「美奈斗が破りたいなら、いいんじゃない？ 俺は構わないし、俺は美奈斗がOKなら全然気にしないって言うか……すぐしたい」

そうやって、股間を私に示します。

あんっ♡ お、オチンチン……パンパンになっちゃっていますっ♡

「ん……お兄様あつ♡」  
「キス、したい？」  
「え……あ……は、はい♡」  
「久々だもんなあ、ここでセックスするの。俺も結構興奮しているよ」  
「んんんっ……お兄様あつ♡」

神の偶像の前で、私とお兄様は、まるで獣みたいに、互いの唇を貪り合うの♡ ちゅーちゅーって、互いの口の中の華を貪って。

「いやらしい奴」  
「お兄様がいやらしいのですっ」  
「んじゃ、本当かどうか試してやろう」  
「んああうっ♡ お、お、お兄様あつ！」

お兄様に抱きかかえられて……私はお兄様の膝の上に載せられてしまいます。

「美奈斗には言っただけだったよなあ……俺、向こうの学校で一番得意だったの、何だか分かるか？」  
「え……い、いいえ？」  
「異端審問さ、魔女の可愛い美奈斗」

そうして……私の股の間に膝を入れ、私の身体を抱きすくめます。

「後半は身体に触れるのが反則だからさあ、時間が掛かるけれど、魔女役の娘はみーんな、俺が陥落させただよ」  
「そ、そんな、い、いやらしいことお、じ、自慢にするんですかっ！」  
「いやらしいことは一つもやってないよ。だって、みんな嫌がるんだよ、俺が恐いってさ」  
「そ、それは……その……まあ、い、いいですよっ」

確かにお兄様の前では丸裸同然。  
私に反論、反撃なんかできないから……ただ、ずつと大人しく愛撫を甘受するだけ♡

「ん……美奈斗、太った？」  
「お兄様！」

「あ、ご、ごめんごめん！ ち、違ってた、何かむちむちしていやしくなったなあ、って思ってたから」  
「そ、そういうのは太ったじゃないでしょ！」  
「ふくよかになった、でも怒るだろ」  
「当たり前です。せめてグラママーになったとでも仰ってください」  
「そうだな。ごめんなー、相変わらずデリカシーに欠けてて」

そ、そんな風に謝られると、ちよ、ちよつと、は、恥ずかしくなっちゃう♡

「んで、そのグラママーの元は……脇腹」  
「ち、違います！」

ほ、ほんととは、ちよつと増えちゃったから……ダイエツトしないといけないのよねえ。

「んじゃ、やつぱり、こつちだな」  
「ん……んあううっ♡」  
「む……エロエロ」

「お、おつぱい……も、揉んじゃ……だ、ダメですうっ♡ ま、またあ……お、おつきくなっちゃううっ♡」

「うん。おつきくしたいなあ」  
「だ、ダメですうっ！ だ、だつてえ、お、お洋服う、き、着られなくなっちゃううっ♡」

そう。体重が増えた悩みよりも、こつちの方が切実。

もう、姉さんと普段着や余所行きのやり取りが出来なくなりましたあるんだからあ。

「いいじゃん。服ぐらい。俺が新しいの買つてやるよ」  
「だ、だつてえ、ぶ、ブラも一緒に買わないといけないんですよ。そ、それもか、可愛いものになっちゃうんだからっ！」

おっぱいが大きければ大きいほどイイなんていうのは、男の人の下らない幻想なんだからっ！

「まあ、その辺の悩みは後で聞いてやるからさあ……教会エッチ禁止されてからの俺の感想言ったい？」  
「え……あ、ど、どうぞ」  
「エロシスター」



「え！わ、私なんですかあつ！」  
「当たり前じゃん。なんだよ、このばつぶんばつぶんのおっぱいっ！乳輪まで浮き出てるみたいじゃないか！」

「そ、そう言ってお兄様は乳房の突起の辺りに指を這わせていきます。」  
「その途端、私の身体に甘い電気が流れていきます。そうです、いつもいつもやっている……あのエッチの甘さ。」

「ふふふ……美奈斗、昔よりずっと素直に顔に出るようになったよな。」  
「え……えへえっ♡ い、いやらしくてえ……ご、ごめんなさいい♡♡ で、でもお、う、嬉しいもん♡♡♡ 気持ちいいもん♡♡♡ だ、だからあ、か、顔出してえ、いいでしょお♡♡♡」  
「そういう顔をエロ面っていうんだぜ。」  
「え、エロ面……」

「そう言われるとかなりシヨックです。え、エロ面ってえ……そ、そんな日本語お。」

「あはは……そんな気になる？」  
「な、なりますよお。そんなに……はしたない顔お、してました？」  
「んじゃ、鏡の前、行こうぜ」

鏡の前——この鏡もたたくさんのエッチでお世話になってます。というより、この教会にあるアイテムはなんだかんだで、お兄様とのエッチに使われているのです。

「さてさて……普段だった俺が弄りたくて、でも美奈斗には見えにくい……とつても、恥ずかしい場所を見て貰っているわけだが、今日は違う」

「う……」  
「今日は、顔を見てればいい。正常な鏡の使い方だよなあ」

「う……そ、そうですけれどお」  
「ま、試してみれば分かるよな」

「そう言っ、お兄様は、私のおっぱいを下から持ち上げました。」

「ひあああああつ！お、おに、お兄様あつ！」  
「な、何だよ、い、いきなり大声出すなよおつ！」  
「だ、だつてえ、お、おっぱいいい……だつて思わなくてえ」  
「え？あ、何？いきなり肝心の場所が良かった？」  
「え……あ……」

「あう……ぼ、墓穴う。」  
「で、でもお……そ、そう思うじゃない。エロ面とか、何とか。それで、お尻い、撫でられてたら、きつとパンティの中に、手入れられたりするって思うじゃないですか。」

「思わないって。美奈斗お、お前ホントスケベになっちゃったなあ」  
「う……うう……お、お兄様のお、意地悪ううっ！」

「そうしてポコポコ殴ってみる。」

「何だか、世の中で言われている、いわゆる“バカッブル”の楽しさが分かったような気がしました♡」

「はいはい、そこまでな。んじゃ、じつとしてな……ふふふ」

「お兄様のくぐもった笑い。」

「うう……そ、そういう笑いをするお兄様は、ちよつと最低の陵辱ハンターにクラスチェンジしちゃうから……もお、まともじゃいられないかも。」

「正面からしておこうな」  
「あ……は、はいい♡」

「私のスカートをたくし上げて、顔をスカートの中へ♡そのままだ腕は、おっぱいを求めて伸びていくわけです。」

「んっ……んあううっ♡お、お兄様あつ♡」  
「鏡見てろよ……この状態だと、俺が確かめられないから」

「本末転倒——これで、私が『全然、エロい顔なんかしてませんでしたよ』って言ったらどうするつもりなんだらう。」

「美奈斗はそういう嘘吐きじゃないからな。さすが、神に仕える女の子だ」  
「うう……そういうところで、戒律を出してくるのって……」  
「七罪の一つ、偽り。簡単だよねえ、七罪の中では一番簡単かも。何しろ、口から出た瞬間、終わっちゃう」

「じゃあ、この行為はなんでしよう？」  
「淫欲？それとも、強欲？怠惰？」  
「うん、多分、全部。」

「んあうううっ……んふうっ♡お、お兄様あつ……お、おっぱいいいっ、コリコリい、し、しちゃうのおっ……い、痛いですうっ♡」  
「ん、痛い？乳首、張ってる？妊娠でもした？」  
「ち、違いますうっ！さ、さつきからあ、す、擦れてるんです」  
「そうか。妊娠したんだつたら、嬉しいんだけどなあ」

「また……この話題。」

「だ、だからあ、あ、赤ちゃん、つ、作っちゃ……ダメです」  
「どうしてさあ……俺は早く美奈斗を孕ませたいよお」

「だ、だつてえ、あ、赤ちゃん、できたあ、そ、そのお……が、学校お、い、行けなく……なっちゃうからあ」

「そんなことないさ。みんな結構気付かないみたいだぜ。いいじゃん、ばれたつて。あ、ばれた方が俺としては面白いかな」

「んもおつ！お、お兄様あつ！」

「冗談冗談——と笑うけど、冗談じゃなかったりする。お兄様は……本気で私を妊娠させたがつてる。」

「それを、私は何とか押し止めていてる。ううん、押し止めてられているのが奇跡かも知れない。」  
「だつて……お兄様が本気になったら、絶対に無理。」

「そう、まだ、私の我が儘の方が強いだけ。」  
「お兄様の本気モードは、私を溶かす。私を狂わせる。私は……従うしか無い。私が必死に取り繕った飯面なんか何の意味も無い。」

「それぐらい、お兄様は……ううん、それぐらいお兄様のこと、大好き♡」



「ん……もしかして、困ってる？」  
「え……あ……そ、そんなことは……」  
「嘘ばかりだなあ、美奈斗は……しょうがないなあ。分かってるよ。俺が美奈斗の嫌がることするわけ無いだろ……」

そう……分かる。

お兄様は、私が本気でいやがることは、しない。絶対に。だから、私が望むまで……こういうことをするんだと思う。



「はい、どっちが悪いでしょう？」  
「あ……あう……わ、私……です……」  
「はい、正解。んじや、どうやってお仕置きしようかな……うん」

お兄様のいやらしい視線。  
こうなったお兄様を止めることは……全然、できないのは分かっている。

「さあて……どんな風にいじめようかなあ」  
「うう……こ、恐い……」  
「恐くないようにしようね……はい、おいで」

お兄様の手招き。  
あたしは、黙ってお兄様の方へ。  
腰を抱きしめられ、私はお兄様の膝の上。  
あう……こ、こうされるとお、こ、興奮しちゃう……んあう……お兄様のお……匂いとお……体温が、すごく好き……

「ふふふ……これ、好きか？」  
「え、あ……は、はい……だ、大好きです……ん……」  
「も、もっとお、寄っていいですか？」  
「股の間に足入れちゃうよ？」  
「そ、それでえ……い、いいです……」

股をはしたなく開いて、お兄様の身体にぴったりと私を寄せます。  
すると……当たり前のように、おっぱいを鷺掴みされちゃう……

「んあう……お、おに、お兄様あつ……」  
「おっぱい責めつて、この間やったよな？」  
「うう……あ、あの後お、ち、乳首い、ヒリヒリしたからあ……も、も、いいです……」  
「そっかあ、ちよつとイジメ過ぎたか？」  
「お兄様のプレイは、全部、ヤリスギです……んもあつ……あう……」

あ！だ、だめ……あ、あそこ……んふ……き、気持ち……よ、良くなつちゃう……

「んじや、何時も通りかなー」  
「え……あ……うう……ま、またあ……」  
「ううん、久々に……美奈斗をいっぱいいじめたよ。いいかな？」  
「え……え……ま、まさか……その……ま、また……あれ？」

「うん。アレ……オムツね。んで、今日のはさすがに美奈斗が全面的に悪いでしょう？」  
「うう……うう……そ、そうですけどお」  
「んじや、美奈斗の敏感なの、両方ともだよ……いいね？」  
「りよ……りよ、両方お……」  
「うん、そうさ……両方ともだよ」

両方……いじめられるのお、久しぶり……あ……あう……だ、ダメえつ……だ、だつてえ……りよ、両方されちゃったあ、ま、またあ、ふ、普通に、せ、セックスう、したくなつちやいます……

「でも、ダメ！両方したら両方ね……美奈斗のスケベな穴を徹底的にいじめる。明日、朝、教会に来ること……いいね」

「は……はい……で、その、きよ、今日は……」  
「今日もしたいの？」  
「あ……あう……そ、そうじゃなくてえ……え、あ、そ、その、それは……し、した……い……です……」

お兄様が含まみ笑いをする。  
あう……が、我慢……できなくなつちゃう……い、いやらしいのお……し、して欲しいです……

「んじや、確かめてからね。ヌルヌルしてたら、エッチしてあげる。その代わり、いっぱいヌルヌルしての、見せるんだよ」  
「は……はい……」

私はスカートをたくし上げます。

あう……あ、甘つたる……え、エッチな匂い、きつくなつちやつて……さ、さっきのビデオ……見たのでえ……ちよつと感じちゃったのかも……うう……

お兄様も、鼻を鳴らしながら、私のパンティの中に両手を入れてきて……前と後ろ……そ、その、お、おま、オマニコとお、お、お尻い、一緒に、指をめり込ませて……うう……

「声、出しちゃダメだよ……まだ、確かめてるだけだからね」  
「うう……だ、出さなつてえ、い、言われても……き、気持ち……い、いい場所お、い、いじ、弄られてえ……んふ……」

「まだチエックしかしてないじゃないか。そんなに気分盛り上げてると、いじめちゃうぞ」  
「うう……わ、わか、分かりました……」

この場合の「いじめちゃう」は、本当にイジメられちゃいます。そう……散々焦らされて、最後はエッチしてくれないんです……  
そんな……おあずけされちゃったあ、あ、朝までえ、お、おな、オナニーしても、た、多分、満足……いかな……

「そうそう……そういう目に遭いたくなければ、黙って俺のチエックを受け入れること」  
「は、はい……」

お兄様の意地悪……わ、私い、こんな風にされるとお、あ、後でえ、いっぱい感じちゃつて、狂ったほどイカされちゃうのお、分かっているからあ、こんな意地悪を言うんです……酷い……

「ふふふ……オマニコも随分熱くなつてな」  
「は……はい……ぱ、パンティい、ヌルヌルしてえ、気持ち悪いです……」  
「嘘吐き。ヌルヌルして気持ち悪いんじゃない、気持ちよくてヌルヌルしちゃったんだろ？んじや、



「コッチの穴は？」  
「んあううっ♡ お、おに、お兄様あつ♡」

「や、やだあつ……こ、声え……出ちゃううっ♡  
どうしてもお……こ、声が……出ちゃううっ♡」

「ん？ どうしたんだい、美奈斗。俺が弄っている場所が、いいの？」  
「うう……うう……い、いじ、意地悪う♡」

「何処弄ってるのかなあ？」  
「うう……ま、またあ、そんなことお、い、言わせるんですねえ……んもお、お、お兄様つたらあ……しよ、しようのない人お♡」

「何回だって言わせるのが好きだよ……特に可愛い美奈斗の声なら、はしたない言葉を何回言わせてもいいなあ」  
「うう……い、意地悪う♡」

「ま、前の方の……お、おま、オマンコの方を弄っていた指まで……う、後ろお……お、おし、お尻の方にい、き、きちゃつてえ♡」

「さあ、言つてご覧。俺の可愛い美奈斗の声で……恥ずかしい言葉、言つてご覧」  
「うう……け、け、ケツう……け、ケツ穴あつ♡」

「い、いじ、イジメ……な、無いでえ……く、くださ……い♡ わ、私のお、み、美奈斗のお、け、ケツ穴あ……い、いじ、いじめないでえ♡」

「でも……ヌルヌルになつてゐるかな？ それは確かめさせて貰うよ」

「お兄様の指が……ゆっくりと、わ、私のお尻の穴に……は、入っていきます。い、いつもとお……お、同じように、せ、責められているんですけれどお……や、やっぱいい、す、好き♡」

「ふふふ……やっぱリヌルヌルだよ。いやらしいアヌスだよなあ、美奈斗のケツ穴あ」  
「そ、そんなのお……お、おに、お兄様のお……せ、せいい♡」

「分かつてるよ……でもさ、美奈斗がここでよがんなければ、こゝまでイジメ回すことも無かつたなあ」  
「そ、そんなのお……だ、だつてえ、き、気持ち……いい、いいんですものおつ」  
「だから、いっぱいしちゃうたんじゃないか。可愛い

美奈斗をもつともつとエッチしてあげたくなって……でも、ちよつとしすぎかなあとか」  
「うう……い、意地悪う♡」

「うん、意地悪だよ……こんなに可愛い美奈斗の肛門がさあ、めくり上がつちゃうほど……いじめちゃつてねえ……可哀想お」

「やつ、やああつ……そ、そんなあ、や、優しいい、な、撫で回しい、だ、ダメえつ♡ だ、ダメえつ♡」

「うん……イイ反応。そんな反応されちゃうとお、ほら、もつと弄りたくなるじゃないか。そんな可愛い反応ばかりすると、美奈斗を妊娠させる前に、可愛いケツ穴拡張で、フィストファックさせちゃうぞお」

「ふい、フィストお……ファックう……だ、だ、めえつ！ い、幾らあ……お、おに、お兄様が……へ、変態さんだからつてえ……わ、私の身体あ、お、オモチャにしすぎ♡」

「もう指が四本入っているのにさあ、今更なんじゃない？」  
「だ、ダメですうっ！ ん、んもお……お、お兄様のお……へ、変態♡」

「まんざらでも無い癖に……ほら、これで三本……入り口辺りは、俺のチンポサイズと一緒かな？」

「お、お尻の穴にい、きよ、強烈な感触……だ、ダメですうっ♡ い、いき、いきなりいっ……ん、ん、んおおおおつ♡」

「あはは……さすがに、キツそうな顔されると、困るなあ。んじゃ優しくね……優しく。可愛い俺の美奈斗……もつといじめてあげるね」  
「あ……あう……お、おに、お兄様あ♡」

「でも、明日の朝はちゃんと俺のお仕置きを受けるんだよ……分かつたね」  
「は……はい♡ お、おね、お願いしますう……わ、私をお、お、お仕置きい、し、して、く、ください♡」

「そうして、今日の夜は普通のセックス……あ、あんまり……普通じゃないですね、お尻で、エッチしちゃうんですから。いつも通りの夜の営みを終えて……お兄様にいっぱいいっぱい気持ちよくして貰いました。朝を迎えるのが恐くなるくらい、気持ちよく……♡」

翌日の放課後。  
ハードな責めが終わる時間。  
控えの間で、お兄様は私が着替え終わるのをニコニコしながら待っている。

「そ、そんなに……う、嬉しそうにしないで……」  
「だつてさあ、楽しみじゃない。美奈斗がどんな風に仕上がっているのかつてさあ」  
「そ、それは……その……んもおつ！」

また……あのエッチな下着、ううん、下着なんて絶対に呼べない代物——だつて、これえ……は、排泄してもいいようにできている——を身につけての学校生活。  
「たつた一日。」

「されど、一日。」

「うふふ……美奈斗がさあ、声を殺しながらお漏らししているのつてさあ、すつごく興奮するだねえ」  
「うう……だ、だからつてえ、じゅ、授業中にさせなくともお」  
「授業中だからいいんじゃないか」

「お兄様の意地悪う。  
ほ、本当に誰かに気付かれちゃうう。」

「美咲あたりは気付いていたかもなあ」  
「ね、姉さん……じゃ、しよ、しようがないですう」  
「そうだよなあ……双予つてテレビバスマいたいのあるつて話だから、美咲も感じてたかもなあ」  
「うう……そ、そんなのお、し、信じません……そ、そんなのお、あつたらあ、ね、姉さんに……も、申しわけが立たないです」

「そんなに気に病むなよ。美咲だつて、祝福してくれているんだからさ」

「かつて、私と姉さん——美咲姉さんとは、お兄様を取り合つた中です。ある種の協定、といつてもそんなに大げさな話じゃなくて、何となく決めたことは「互いがアプローチしている間は、相手の邪魔をしない」つてこと。」



優しいお兄様だったら、絶対に私たちが諍いして  
いたら、止めるし、きつと……私たちが離れていっ  
てしまう。そんな予想が簡単についてたからです。  
そうして、私は姉さんとの競争に勝ちました。無  
事、お兄様は私の物……うん、本当はそういう言  
い方も良くないのだけれど……そうして私は  
勝ち上がったわけですよ。  
でも……今でも姉さんには申し訳ないって思っ  
ているのです。

「そんな風に思っていると、美咲に取られちゃうぞ」  
「そ、それなら……仕方ない」と  
「バカ！俺が選んだの、どうするんだよ……まっ  
た、こういう時の美奈斗は、ちよつと頼りないよ  
なあ。いつもの強気はどうした？」  
「そ、そんなに、つ、強くないですよ」  
「ふふ……強くない女の子が、そんな最低の下着で  
一日我慢できるのかよ」  
「そ、それは！そ、それは……お、お兄様が……す、  
好きだから♥」  
「んじゃ、その好きって気持ちで頑張れよ……俺は美  
奈斗を選んだんだからさあ」  
「……あ、はい、はい！」

私は着替え終わってもいなかっただけで、お兄様  
に飛びついて、抱きついて、キスをねだります。  
「しょうがないなあ……んじゃ、ん……」  
「んふうっ……んふう……♥ん……す、好き♥  
大好き♥お兄様♥♥」  
「はいはい、可愛い甘えんぼの美奈斗……おいで……  
教壇の上で可愛がつてやろう」

そうして聖堂の中へ。  
身体を持ち上げられて、教壇の上に乘せられ、足  
を開かれます。  
むつと蒸れた臭気が、私の鼻にも届きます。

「うわあ……いやらしい臭いだなあ。よくこれでばれ  
なかつたなあ」  
「そ、そうですよおっ！ば、ばれてたら……ほ、本  
当に大変なことに……なつてたんですからあつ！」  
「そうだねえ。でも、大丈夫だろ。今日は体育も無かつ  
たしさあ。俺といつも一緒だったから……他の女の  
子にも気付かれないうら」

「うう……そ、そうですけれどお」  
でも、一緒の間、ずつとずつと股間では異音が響  
いて……いやらしい気持ちを高め続けていたんです。

「何、パイプ、きつかった？」  
「そ……それは……」  
「その顔だと、これもまんざらでも無いわけね。とい  
うことは、やっぱり人に知られるのが……恥ずかし  
い？」  
「そ、そう……なりますかね。わ、私にも分かつてい  
ないんです」  
「ふーん……難しいな。んじゃ、難しいことが考えら  
れないように気持ちよくしようね」

お兄様はパイプのスイッチを入れました。私の股  
間で、あの感触が一斉に沸き上がります。  
「んんあああ♥♥♥ま、またあ♥♥♥またあ♥♥♥  
ら、らめえ♥♥♥んんふう♥♥♥んんふう♥♥♥  
ふう♥♥♥んんんんんん……んんんあああ  
ああ♥♥♥」

ぐいぐいといやらしい音。全部……私の中から響  
いている。ま、またあ……またあ……と、とろけてえ、  
きちやう♥♥

「んじゃ、今日はそのとろけ具合を確認しようね……  
外すよ」  
「んああ♥♥♥んあああ♥♥♥ら、だ、だめえ♥♥♥  
い、今はあ……んんん♥♥♥んんふう♥♥♥く  
んんん♥♥♥」

ううう……み、見込み違い……わ、私い、てつ  
きりい、こ、このまま、お、お漏らしを強要される  
と思つて……が、我慢してたのにつ……

「ふふふ……ビシャビシャで、テープとか剥がれてき  
ちゃつていようねえ、いやらしいなあ……どれ、も  
う少しパワーアップね」  
「んんひひひひひひひひ♥♥♥ら、らめえ♥♥♥  
らめえ♥♥♥んんんああああああああ♥♥♥  
で、で、出ちゃうう♥♥♥」

次の瞬間……私の弱々しい堤防はあっさり決壊し

てしまうのです。  
——ぷつしゃあああああああああああああつ  
……ばしゃばしゃばしゃ……ばしゃばしゃばしゃ

「あつ……んあ♥♥♥ああ♥♥♥ああ♥♥♥ご、ご  
め、ごめ、ごめんなさい……んんんひひ♥♥♥ん  
んんん♥♥♥」  
「あは……気にしないで。ふふふ、美奈斗の可愛い  
の、また見れて嬉しいよ」  
「ううう……は、恥ずかしい……ですう♥♥♥こ、  
こんなの……こんなの、み、見られてえ……こ、  
興奮してるの♥♥♥」  
「興奮してる？パイプのせいじゃなくて？」

パイプのせいばかりではありません。  
お漏らしの、失禁の瞬間、私はもの凄く興奮して  
いました。

また、お兄様に……大好きなお兄様に、はしたな  
い……最低の……いやらしい……恥ずかしい……私  
の姿を見て貰えたのです。  
それだけで、私のアソコは熱く潤んで、とろけて  
流れ出しそうでした。  
私は言葉を選んで答えようとしたのですが、全然  
出てこなくて……ただ、視線を逸らしながら頷くし  
かありませんでした。

「あ、あは……可愛い……美奈斗」  
「え……あ、お、お兄様♥♥♥」  
いきなり抱きすくめられて、キスされて、キスさ  
れて……ずつとキスされて。

「お、おに、お兄様……そ、そんなに、よ、喜ば  
ないで……は、恥ずかしいですう♥♥♥」  
「これが喜ばずにいられるかよ。可愛い妹が、気持ち  
よすぎたお漏らしして……俺の前で失禁して……俺、  
幸せだよ。変態かも知れないけれど、これは」

もう一回……キス♥  
ん……と、溶けちゃいますう♥♥

「んで、こつちにもな……」  
「あ！だ、だめえ♥♥♥そ、そつちはあ……そつち



はあ……よ、よご、汚れてるからあつ！ んん  
ひいひい……ら、らめですうっ♡

もう……すぐ……呂律が回らなくなっちゃうう  
だ、だ、ダメですわっ……んひいっ♡ んひいっ♡  
んきひいひい♡

「こういうテープってのは、優しく剥がさないと痛い  
からね……俺の唇で剥がしてあげるからね」

「あっ♡ んああっ♡ ら、らめっ……いい、いいです  
からあ、い、いいですからあつ、い、痛くしてもい  
いですからあ、そ、そのような……真似はあつ」

「俺の可愛い妹に、こんな酷いことをしちゃう兄貴な  
んだから……これぐらいの奉仕はさせてくれよ」

「そ、そんなことお……な、無いのにいっ……お、お  
に、お兄様あつ……」

「ふふふ……濃い臭いと味……丸二十四時間浸かって  
いたわけじゃ無いけど、何か酷いことしちゃったか  
な」

「そ、それは……」  
「痒かったり、気持ち悪かったりしたでしょ。ごめん  
ね……綺麗にしてあげるから」

「そうして、私の膣前庭部をお兄様はむしろぶるよ  
うに、音を立てて舐め回します。私は気持ちいい感  
触に震え、興奮し、潮られるのを、歓喜の声を上げ  
るのです」

「やがて、体液と舌先で潮られたテープが徐々に捲  
れ上がってくる」

「美奈斗がパイパンでよかったよ」

「お、お兄様あつ」

「だって、痛いぜ？ これ剥ぐのに、多分毛を剃り落  
とすがセオリになるぐらい……こうやって、可愛  
がりながら後始末できるのは、僕偉だと思ってもい  
いんじゃない？」

「だ、だとしてもおっ！ だとしても、女の子に恥を  
かかせるようなこと、い、言わないで下さい！」  
「はいはい、お姫様……ん、ちょっと固いな、こっち  
のテープは……どれ」

「お兄様の舌が、ぐつと力を込めてテープに挑む。で  
も、ちよつと皮膚を引っ張る感覚があつて、剥がれ  
そうにない」

「さすが、テーピングに使う奴だけあるなあ。一気に  
剥ぐと痛いし、幾らパイパンでも」

「そ、そんなこと、く、繰り返して、言わないで下さ  
いっ！」

「さて……油とか、石鹸水とか、ヌルヌルするので剥  
ぐがよしだけれど……おっ！ あるじゃん！」

「私が何かを聞く前に、お兄様は、私の敏感な場所  
へと舌を進ませていつちゃうのです」  
「そして、ジュルジュルと音を立てて、愛液を口に  
含んで……それから、テープの所で舌を押し付けて  
いくのです」

「ちよ、ちよつと、お、お兄様あ、そ、そんなので、  
は、剥がれるわけ」  
「いやあ、馬鹿にしたもんじゃ無いぞ。ズルズル剥が  
れてきてる……結構すごいな。そりゃ、オマンコに  
貼ったのが、ベロベロになっちゃうわけだ」

「そうして、お兄様は私の愛液を吸いながら、テー  
プを剥がすために、私の下半身を弄んでいるのです。  
でも、そ、そんな風に責められると、わ、私い、か、  
感じちゃうじゃないですか……」

「愛液がトロトロになつてきちゃったね……興奮して  
いるんだ」

「だ、だつてえ……お、おま、オマンコお、い、いじ  
められちゃってるからあ♡」

「オマンコ気持ちいい？」

「……は、はい♡」

「セックスする？」

「……な、中出し、しない……ください……」

「う、む……じゃ、いつも通りにしちゃうよ？ お  
尻でいいの？」

「そ、そつちでいいですう♡」

「だ、だつてえ、な、中出しされちゃったあ、あ、  
赤ちゃん……できちゃうう♡」

「え……あ、あのお……も、もしかして、い、今……  
入っているの……」

「オモチャ入れたままだが嬉しいの？」

「あ……そ、そんなことお……な、無いですう……  
うう」

「私は教壇の上で、お尻を突き出すようにしてしゃ  
がみ込まれるのです。もちろん、お尻の先にはお  
兄様の顔があつて」

「こ、こんな格好でえ……う、ウンチい、するみたい  
な真似はあつ……」  
「何言ってるんだか。美奈斗の排泄関係も俺が完全  
に掌握しているんだから……今更恥ずかしがるなよ」

「うう……あ、改めて言われると、すつごい恥ずか  
しいです」

「下半身の関係は……伴侶となるお兄様に支配され  
ちゃっているんです。も、もちろん……お、大きい  
方も」

「お兄様の変態趣味……というより、私が恥ずか  
しくなることだったら、何でもって感じですよ」

「で、でもお、あ、朝のアレはあ、で、出る所お、見  
せているわけじゃないですう！」

「代わりに、俺がチンポしやぶらせてるんじゃない  
か。すつごい嬉しそうだったぞ、美奈斗は……ウン  
チしながら、可愛い声漏らして……その上、兄貴の  
チンポをしゃぶって……なんて、いやらしい妹なん  
だろ」

「お兄様の言葉の一つ一つが私の羞恥心に突き刺  
さってきます。そして、そう告げているお兄様自身  
の欲情も高まっているのは……声の調子と、お尻へ  
のアプローチで分かっています♡」





で蒸れちゃっているからあつ。

「あ……ああ……ああ……お、お、お兄様あつ……んふうっ♥」

「そんなに震えなくてもいいじゃないか。可愛い美奈斗のお尻……ホント可愛いよ……こんなに美味しそうなの——」

私は背筋を伸ばすほど、びつくりさせられます。だって、お兄様が……お尻の肉に何度も、何度も、噛み付いて。

ん……ゾクゾクしちゃった♥

「お、お兄様あつ、だ、ダメですうっ♥ そ、そんなに、か、噛んじやあ……んふうっ♥」

「美奈斗が放り出さないからだよ……このいやらしい肛門から……こんなに赤くなつて、ぷっくり膨らませて、いやらしいなあ」

「そ、それは……お、お兄様のお、え、え、エッチの、せ、せいですよお」

「そうかな？ 美奈斗のアナルオナニーが原因だろ？ あんなに捲り上げるほど、挟ったら……肛門がこんなによろしくなつちゃうのも当然だな」

そ、そんなのお……ち、違いますうっ……だ、だって……こ、こんなの……違いますうっ♥

「何だよ……違うのか？ でもさあ、こんないやらしいの、美奈斗の一人遊びじゃなければ……俺のせい？」

「……そ、そ、そうとばかりは……い、言えないですけれど……お、お兄様のお、せいも……あると思いますうっ♥」

「そう……だなあ。俺もちよつと美奈斗いじめすぎたかもなあ……うん。でも、今は今で楽しまないとなあ……んちゅうっ♥」

「ひあああああああつ♥ ら、らめええっ♥ そ、そんなあ……そんなあ……吸つちゃあつ……だ、だ、ダメですうっ♥」

「だって出してくれないとさあ、エッチできないでしょお……ふふふ」

「わ、わか、分かりましたあ……そ、そんなに、い、いじ、いじめないでえ……だ、出しますうっ……出しますからあつ♥」

ああ……こ、こんな恥ずかしいことお、し、したこと無いのにいっ……んふうっ♥ くうんん♥

「ん……んくうんん♥ んんんおっ……おおっ……で、で、出ちゃうう……んふうっ♥ んんんんんん♥」

——ずるうっ……ずるうっ……ずずずううっ♥

「興奮してる？ 気持ちいい？ 気持ちいいよね？ その顔……トイレで何時も見せてる顔だよ……分かつてる？」

「そ……そんなことお、い、言わないでえっ……は、恥ずかしいすぎますうっ♥ くうんんん♥ んんんんん♥」

もう……あと……ちよつと……ば、バイブが残っているのは……雁首の辺りだとお……お、思うう……けどおっ……んふうっ♥

「大分、出て来ているねえ。でも……美奈斗、分かる？ ここ一番気持ちいいんだよ」

「え……あつ！ だ、だ、だめえええっ！」

声を上げたけれども……お兄様は容赦なくバイブのスイッチを入れました。

瞬間、バイブの頭がグルグルと回って、私のアヌスを拡張していくように、動き始めるのです。私は悲鳴を上げ、さつさと放り出そうとするのですが、一番太い部分が引っかかってしまい、上手く排出できません。

更に、わき上がる振動と動きに、私の快楽中枢は刺激される一方なのです。そのために、肛門の筋肉に力が入らなくなってしまうのです。

「んんおおおっ♥ おおおおっ♥ だ、だめえっ……ダメですうっ♥ と、とめ、止めてくださいいっ！ お、おに、お兄様あつ！」

「だ……め……もう少し気持ちよくなつてからね。ほら、だんだんこなれてきて……お尻からもエッチなおつゆが出てきちゃったよ」

「んんひいっ……だ、ダメですうっ♥ だ、ダメなんだ……そ、そんなのお……そんなのお、だ、出しちゃあ……だ、ダメなのにいっ♥」

異物感と排泄を促そうとする内臓が、体液を滲ませてしまっているのです。お兄様と……え、エッチする前から……こ、こうなつちゃっているのは、分かるのですが……あらためて言われるととてもなぐ恥ずかしいです。

「そりゃ、恥ずかしいだろうね。何しろオマンコ以上に濡れるケツ穴なんだからさあ……美奈斗のケツ穴はあつ」

「い、いやあつ！ そ、そんな、い、言い方あ……んんんんんおおおおっ♥」

「そんなに無理に否定すると、また根本まで挿れちゃうよ？ 最初から放り出し直しの方がいいのかな？」

「うう……で、でもお、わ、私にだつて……そ、そのお……ぷ、プライドお……お、女の子としての……プライドがあ、あ、ありますうっ！」

「プライドねえ……そんなアへ面を俺に見せておいて、プライドもどうかと思うよ。美奈斗は、もつと自分の快楽に従順になった方がいいよ」

そう言うってお兄様はバイブを一気に引き抜きました。私は、その行為の予想もできず、激しく身体をシエイクさせ、声にならない悲鳴を上げながら……アナルで最初の絶頂を迎えたのです。

「ふふふ……いい格好だよ、美奈斗お」

「あつ♥ んあああつ♥ んあああつ♥ ら、らめええ……お、おし、お尻い……お、お尻い……」

「うんうん……いい感じに広がって来てるね。でも、俺のチンポを挿れるには、少し狭いかもな……もう少し拡張してからだね」

下半身に力が入らない……足はだらしなくがに股に。そして……何もかも晒した状態。お兄様の目の前に恥部を、内臓の奥の奥を見せている……な、何回も何回も経験している苦なのに、やっぱり女の子として、耐えられないです。

「そうそう、耐えられないよね……だから、美奈斗は可愛いなあ、って思うんだ。素直に耐えられないって顔してくれるから。でも、耐えられないっていう苦悶と、気持ちいいっていう歓喜は本当に紙一重だからね」

「ん……な、何……を……」











「分かっていきますわ……お兄様が気持ちよくないのに、無理しないのお、よく知っておりますものお」

そう……インターバル無しで直腸の奥から子宮を責められたのは、これが初めてだったかも知れないです。

いつもなら私が根を上げて許しを請うか、絶頂失禁して強制的にインターバルを迎えるからなのです……

「さつきお漏らしさせちゃったし、美奈斗もこなれてたからかな？」

「んふう……わ、分かりませんわ♥ うふふ……ん、お兄様あつ♥ 少し休みませんか？ ご奉仕いたしますわ……♥」

お兄様は、頷き……私の足を広げて、ゆっくりとチンポを引き抜きます。

ぱっくりと口を開けてしまう私のアヌス。恥ずかしいですけど、お兄様が覗き込みます。

それは、当たり前に行為。私にたっぷり中出しした後、どんな時でもこうされちゃう♥

「結構出したのに……なかなか出てこないなあ」

「ん……だ、出したら……よ、よろしいですか？」

「いや……そのまま開いていて。あ……垂れてきた。ふふふ……いやらしいよね、この光景はさあ」

開ききったアヌス……そこから、遮る物が無いが故に滴り落ちる愛する人のザーメン。それを惜しげもなく晒している……私。

神前だというのに、はしたない男女の行為……獣以下の行為に、神の使徒であるお兄様と、神の尼僧である私は……墮落しきる。

「いいよ……閉じてご覧。痛いところとか、無いかな？」

「んん……ん……だ、大丈夫ですわ♥ で、でもお……ゆ、指を四本も入れられた時は、本当に裂けてしまうかと思いましたが、そ、そういうの……や、止めてください」

「うーん……俺も調子に乗るとすっごく痛くていやらしいこと平気になっちゃうんだよね。頑張って自制するから……許してよ」

「さあ、奉仕してよ……ね」

「あ……♥ は、はいっ♥」

奉仕——それはフェラチオ♥

私のアヌスの中で汚れているお兄様を綺麗にする……時々、汚らしいことをしているって思うこともあるけれど……元は私のだし、お兄様のをしゃぶれると思うと全然平気なの♥

「んふう……んちゅう♥ んちゅう♥ チンポお……少しい、柔らかくなってる♥」

「当たり前だ。射精したばかり何だから……あ、あんまり激しくするなよ」

「んあう……お、美味しいよお♥ 甘いのお……苦いのお……お兄様のお……いっばい……感じるうう♥」

「恥ずかしいこと言うなよ……しょうがないなあ。ほら、また元の固さに戻るぞ。噛むの、好きだろ？」

「う、うんっ！ うんっ♥ んふう……んちゅう♥ んふう♥ くうん♥ か、硬いっ♥ か、噛み応え……いいっ♥ 美味しいっ♥ んちゅう♥」

「しよ、しょうがない奴だなあ……先端はダメだぞ、本気で痛いからな」

お兄様に言われるまでも無く、私が歯を立てて味わうのは……チンポのガチガチの場所お♥ それも、本気じゃなくて……優しく。

でも、ちよつと固めのお肉を貪るように、顎に力を込めることもある。そういう時、お兄様はちよつと顔をしかめるけれど——

「いいよ……もつと、噛んで」

声を上擦らせて、私に要求する。

私は、言われるままに……ゴリゴリ……ゴリゴリ……と噛みしだいていく。

すると、再び射精の機運を高めたチンポからは、先走り汁が「つびゅっ！ つびゅっ！」って噴き出して……私を染ませる。

「うう……よし、美奈斗お……またセックスしてやるよ」

「んあう……う、うれ、嬉しいですよ……し、してえっ♥ してえ……く、下さいっ♥」

「ああ……でも、その前に、入って来いよ」

お兄様は「誰か」を呼びつけた。

私と、お兄様の愛の営み。

そんな所に誰が来るといふのだろう。

「んにやあう……み、美奈斗ちゃん……ご、ごめんなさい♥」

私の姉さん——美咲姉さん。

愛用の巫女服を着て……ううん、あまりにも着乱しているから、着ているなんて言えないかも。

おっぱいを剥き出しにして、片手でコネコネしてしながら……内股でよろよろと私の目の前に。

でも……見慣れないもの……

「ね、姉さん……ど、どうして」

「ああ、俺が呼んだんだよ。美咲にも困ったもんでさあ」

お兄様は喜々として話している。

私には全然飲み込めない話。

姉さんが、持てあました性欲の捌け口をお兄様に求めた。それは分かる話だ。

それが、便所奴隷とかそういうのは、私の大切な姉さんの口から聞きたくは無話だが、やっぱり飲み込める話だ。

「で、でも……そ、それは……」

緩やかな袴の中でさえ、それは異質な存在感を見せつけている。それは間違いなく……ペニス……男根、オチンチン……チンポだ。

「まあ、ちよつと変わった趣向もあつてね。でもね、意外に美咲にはしっくりしたんだよね……なあ、美咲い？」



「んにゃあうう……にいにい、そ、そんなの、美奈斗ちゃんに話しちゃ、や、やだよおつ」  
「あれ？ 美咲、俺の奴隷だろ……大人しく、ご主人様の言うことを聞けよ」

お兄様は、姉さんが制止するのも無視して、強引に袴をたくし上げたのです。  
可愛いシマパンティをピンと引き延ばして、起立しているのは間違いない……チンポです。それも……先汁ジュルジュルでえ……甘ったるい女の子の臭い。それが……チンポから漂ってくるのです。

「んああつ♡ だ、だめえつ……もお、もお、ダメだよおつ♡ み、美奈斗ちゃん……ご、ごめんねつ！ ごめんねつ！ んんんにゃああううつ！」

そうして、姉さんは……私の口の中に、パンティごと口の中にねじ込んできたのです。  
こうして……私はお兄様と姉さんの秘められた情事の中に叩き込まれました。  
それから、私も変容していったのです。



私は……怒っていません。  
姉さんのことはしょうがないと思いました。お兄様が、好きなのは分かっていました。お兄様でも、私も引くつもりは無かったから……こんなことになったのは残念でした。  
もちろん、姉さんと一緒にお兄様を愛するのは、私の中で何の問題もありません。昔で言うなら、正室は私で、側室は姉さん。  
それだけのことです。

「で、でもお……こ、これはあ……」  
「我慢できない？」

お兄様はベンチに腰掛けて、ニヤニヤしています。  
んも……ひ、酷いことして……これでえ笑っていただけるのですから、私のお兄様は変態です。

「あれ？ 分かってなかった？ 昔からだよ……変態なのは、さあ」  
「分かっていませんでした。それも、ここまで……反

神的な態度も、です。まったく……」  
「両性具有、アンドロギュヌスは、太古に存在した原罪を持たぬ人類だぜ？」

「そ、それを……人の力で作り上げて……それも、神の子であり、ご自分の妹に……設えるのは、人の、いえ、男の倫理としてどうなんですかあつ」  
「うん、普通。っていうか、意外に美奈斗は冷静で好きかな。美咲は、すぐ甘えた声を出してさあ、手扱きを欲しがって……困ったんだ」

この状況を姉さんと比較されて、まともで良かったと言われるのは……もしかしくなくても侮辱です。

「あれ？ そうか？ チンポ生えて冷静な美奈斗は、エッチのしがいがあるっていいなあ、って言ったんだぜ？」  
「そ、そんなのお……し、知りませんっ！」

私はそっぽを向きました。  
そうでない……その……は、恥ずかしいの……見えちゃうからあ♡

「逃げるなって……それにさつきは見ただけで弄らなかっただろ？ 優しいお兄ちゃんで良かったら？」  
「うう……お、お兄様のお、い、意地悪っ♡」

「だって、せっかく精通する日なんだから、できるだけいやらしくしたいじゃないか」  
「そ、そんなのお……お、お兄様が嬉しいだけじゃありませんかあつ！」

「俺が嬉しいのは、美奈斗が嬉しい時だけ。それに、美咲が可愛そうだろ。ふたなりで、毎日毎日男子便所でセズリしているお姉ちゃんを可愛そうだとは思わないのか？」

「そ、それと、これはあつ！」  
「まあまあ……んじゃ、ちよつと動かそうな」  
「えっ！ ま、待ってえっ！ んああつ！ んああああああああああああ！！！！！！」

お尻の、オマンコのパイプが震動します。一番小さいレベルでのバイブレーションです。

でも……私の下半身を支配するのは、これまでにない激しい快楽です。  
それが……それが……この、起立した……い、い、いや、いやらしい……ち、チンポにい♡ チンポにいいいっ♡

「んんきひいひいひいひいひいひい♡ ら、らめええええ♡ らめえええええ♡ ち、ちい、チンポおっ♡ ち、チンポおっおおおっ♡」

いつもと同じ場所。  
いつもと同じ格好。  
いつもと同じブレイだというのに。  
私の身体は、まるで別人のように反応しています。こんな反応……お、女の子じゃ、味わえないものです。

「んんぎひいひいひい♡ い、痛いっ♡ ち、チンポおっ♡……痛いっ♡」  
「ん？ ああ、そうか……ポジションが悪いのか。んじゃ……自分で直してご覧」

お兄様に手を取られて……もっこり隆起している場所に手を置かれます。  
置いた瞬間、さつき感じたものと同じ衝撃が私の下半身を包んでいました。

「ん……んあううつ……んんん♡ くらんんん♡……こ、これえ……でえ……い、いいですかあつ？」  
「気持ちいい？」

「は、はいっ♡ き、気持ち……いいですうっ♡」  
「こ、これえ……ば、バカになっちゃうかも知れないっ♡」

「バカになっちゃうか……美咲を見れば、それも分かる話だなあ」

姉さん……確かに、ちよつと抜けている所もありますけれど、お兄様に「バカになった」と言われるほどじゃないから……こ、この快楽は女の子にとって禁断のものなのだろう。

「お、おに、お兄様あつ……こ、これえ……き、気持ち……いいですうっ♡」  
「もうすぐもつと気持ちよくなるよ……ほら、パイプの強度を上げていくからね」

んあううつ♡ き、気持ち……いいですうっ♡  
お、お尻も……お、オマンコも……一緒にブーブーと震動が広がっていくのです。  
いつも犯されている場所がオモチャで刺激される

度、生やされちゃったチンポにピンピン響いて来  
ちゃうんですう♡

「んあうう♡ ンあうう♡ ち、チンポおっ  
……んんふう♡ ンんんふう♡ ち、チンポ  
に……ぐうううてえ、な、何かあ……で、出てき  
ちゃうう♡」

「先走り汁だよ……でも、女の子でもカウパーモドキ  
が出てきちゃうんだから……不思議だよなあ」

「んん……お、お兄様はあ……い、いつもおつ、こ、  
こんなのお、か、感じてるのお？」

「ああ……多分ね。中から、つびゅつつびゅつ、つて  
出てくるの、感じるだろ？」

「は、はい♡ ち、チンポお、ビクッつてするたび  
に、き、気持ち……いいのおつ……出てきてえ……  
さ、先っぽがあ、よ、汚れてるのお、ちよ、ちよつ  
とお、気持ち悪いですう♡」

「だから、オムツ履きななんだよ。ふふふ……俺、ちよつ  
と興奮してきたよ」

そう言っ、お兄様は私の身体を抱きしめます。  
お兄様の上に乗せられて、パイプの震動は激しさ  
を増していく一方です。

お兄様の体温を感じると……私の中で、いつもの  
興奮が盛り上がって来ちゃいます♡

「あんまりチンポばかり激しくしちゃうと……美奈  
斗が女の子だっていうこと、忘れちゃうからな。美  
咲でよく分かったんだよ」

「ね、姉さんでえ？」  
「うん。ちよつとね……あんまりチンポばかりいいじ  
めたらさあ、今まで以上に壊れちゃうたみたいで  
……」

「お、おに、お兄様あ……そ、そんなのお」  
「大丈夫だって。美奈斗がチンポバカにならない限  
り、俺は美奈斗を女の子として可愛がるつもりだか  
らさあ」

そういつて、服の上からおっぱいを愛撫していき  
ます。興奮して、コリコリになった乳首をこね回さ  
れると……すごい気持ちいい♡  
私が女の子であることも思い出させてくれるので  
す。おっぱいが気持ちいいのは……女の子だけの特  
権だと思ふのです。

「そうでもないぜ……男でも乳首感じるんだから。で  
も、こうやって」

「んあうう♡ ち、こ、こねこねえ……されちゃ  
うう♡ ち、き、気持ち……いいですう♡」  
「こうやって男は、おっぱいを揉めないからね……女  
の子の肉体はすごいと思うぜ。こんな気持ちいい  
の……すごいと思う」

お兄様の手が私のおっぱいに食い込んでいきます。  
ぐううと……食い込んでいき、まるで乳房を犯さ  
れているような錯覚を覚えるのが、すごく気持ち  
いいです♡

「ふふふ……おっぱいばかりじゃダメでしょ。どう？  
チンポにも響く？」

「んん……ち、チンポに……と、取られちゃってるみ  
たいですう♡」  
「ふふふ……んじゃ、そろそろ美咲と同じプレイにし  
ようね……」

お兄様の手がオムツの上に、ゆつくりと置かれま  
す。分厚いオムツの苦なのに、私にはお兄様の熱い  
体温を感じることもできました。  
そして、ゆつくりと掌が……勃起しているチンポ  
を包んでいくのです。

「あつ♡ あつ♡ あつ♡ ああ♡ ンんああ  
ああ♡ だ、だめえ……だ、だめえ……」

「何か？」  
「ま、まだあ……だ、ダメですう♡ ンん……こ、  
こ、恐い……こ、恐いよおつ」  
「恐くない……すぐに好きになるよ」

そうして私は震えながら、最初の衝撃に備えまし  
た。でも、備えたところで、私の身体から沸き上  
がる興奮に我慢できるわけが無いのです。

「んんあああああああ♡ ち、ち、チン  
ポおおお！ ち、チンポお……ち、チンポお……  
ち、チンポおおお♡」

「こらこら……いきなり壊れないの。しょうがない  
なあ……美奈斗も」  
「あ……あ……だ、だ……ち、チンポです  
よおつ♡ ち、チンポお……き、きも、気持ち……」

いいいつ♡ お、男のお、ズルイいつ……こ、  
こんなのおつ♡ こんなのおおつ♡」

私は股間を何度も痙攣させながら、興奮させてい  
ました。痙攣と同時にチンポが……ビクッビクッ、つ  
て動くのを知りました。

私は自分の意志で動くのかな、と思ひ股間に力を  
入れてみました。すると……

「おつ……ふふふ、動くの、分かったかい？」

「は……はい♡ う、動くのお……ち、チンポつ  
てえ、こ、こんなに、動くのお？」

「動くよ。括約筋のせいだけれど……動いているの、  
分かるだろ？」

「は……はい♡ な、何かあ……面白い♡」  
「面白がつちゃダメだよ。これを使って、女の子の中  
を抉ったりするんだから。あと……射精するのを我  
慢するの、括約筋に力を入れたりするんだ」

そう聞くと……男の子もちよつと大変だなあ、と  
思いました。腰を動かすばかりか、こういうことま  
で気を回さなくちゃいけないって……ホント、大変  
だと思ひます。

「こ、こんなあ……き、気持ち……いいのお、とお、  
い、い、一緒にいつ♡ 一緒にい……そ、そんなのお、  
か、考えられないですう♡」

「まあ、慣れみたいなものかな。だって、ずっと一緒  
なんだぜ……その硬くなる奴と」  
「で、でもおつ♡ でもおおつ♡ こ、これえ……き、  
気持ちいい、よ、良過ぎい、ますううう♡」

オムツの中で「つびゅつ♡ つびゅつ♡」と先走  
り汁が噴き出して……どんどんどんどんオムツが汚  
れていきます。

おしつこと違つて粘液なので、そう簡単に吸湿さ  
れず……私のチンポの先を、ニチャニチャと嫌らし  
く汚している感触に、私は震えています。

「んじゃ、そろそろ気持ちよくしてあげるね」  
「んああ♡ ンんああ♡ こ、これ、これ以上  
はあつ……こ、これ、これ以上はあつ……だ、ダメ  
ですうう♡ だ、ダメなんですう♡ ち、き、気持  
ち……よ、良すぎますうう♡」

「ダメっ！ こっからが本番なんだから」





チンポを刺激されて、鼓動に合わせて、どつくんとくんと痙攣するチンポの感触。  
女として、こんなのをダイレクトに感じさせられていて……までもでいられるわけがありません。

「んんああああああつ♡ ら、らめえつ♡ らめえつ♡♡ ち、チンポおつ♡ ちい、チンポおおおつ♡ くうんんんんんん♡」

お兄様の手が、私のチンポを掴みました。  
そして、それをシュツシュツシュツ、って動かしていきます。

「よく覚えておくんだよ……これがチンポいじりの仕方だからね。まあ、どのみち、すぐに実践できると思うけれどね」  
「そ、そんなあ……んんふうつ♡ くうんんんん♡ んんんんおおおおつ♡」

だつてえ……こ、こんなのおつ♡ お、お、覚えてたつてえ……き、気持ち良すぎて……こ、困っちゃいますうつ♡  
「んあううつ♡ んあううつ♡ こ、こうやってえ……じよ、上下にシコシコしちゃうなんてえ……んんんふうつ♡」

「中でどうだい？ 竿全体って感じじゃないだろ……チンポの先っぽ、亀頭の辺りが気持ちいいだろ？」  
「わ、わか、わかんない♡ わあつ、分かんないですううつ♡ んんおおおつ♡ おおおつ♡ い、い、いっ♡ いっ♡ いっ♡」  
「もつと意識して……ほらっ！」

お兄様の指が、きゅっ♡ と先っぽのくびれの辺りに力を込めて締め上げます。さっきお兄様が言ったことお……分かってきたような気がします♡

「ふふふ……そうそう、その顔を見れば感じ方が分かってきたって、俺も分かるよ」  
「ううう……い、いじ、意地悪♡」  
「どれ……んじや、射精の感触を味わって貰おうかな？ ふふふ……俺の可愛い妹のふたなりチンポの初射精、精通をさせてあげるね」

「だ、だめえつ♡ だ、だ、だめえつ♡ だ、ダメですううつ♡♡ こ、これえ……だ、ダメですううつ♡♡ す、すっごいのおおつ♡ だ、ダメですううつ♡♡」  
「あはは……美咲と同じ反応だよ。でも、美咲はもつと嬉しそうに、自分でセンズリまでしちゃったけれどね……さあ、覚悟して」

私は「ダメですううつ♡」という言葉以外を全部忘れてしまったかのように、首をブンブン振りながら、お兄様の行為を制止させようとしています。  
でも……そんなので止めるわけ、無いんです。

「んんぎひひひひひ♡ ら、ら、らめええつ……つ、つ、強いひひひ♡ つ、強いですううつ……そ、そんなにい、そんなにい、し、し、搾っちゃあつ……んんんんおおおおおつ♡ し、し、扱かないでええつ♡」  
「ん……そんなにキツイ？ でも、これぐらい我慢しない、イケないよ？」  
「い、い、い、イケなくてえ……い、いいですううつ……も、もつとお、や、優しく……や、優しくううつ……」

締め上げられながら、チンポのくびれの辺りだけ、シュツシュツとされるとお……ち、チンポおつ……チンポおつ……ビンビンってえ、か、感じ過ぎちゃうんですうつ♡

「んじや、自分でしてご覧。射精するまで、今日はエッチお預けだからね」  
「うう……わ、わか、分かりましたあ♡ んんふうつ……くうんん♡」

オムツの上から、そつと包み込むようにしてみます。それだけで、ゾゾゾオって、快感が這い上がってくるのです。

「こ、こんなのでえ……しや、射精なんてえ……ど、どんなことになってしまふのか、わ、私には……わ、わ、分からないことですう♡」

「んんふうつ♡ んんふうつ♡ んんんくうんんんん♡」

「どう……出そう？」  
「ま、まだあ……ですう♡ も、もつとお……し、シコシコしないとお……いけないんですかあ？」

「ああ。オムツの上からだ、上手く皮も裏筋も弄れないからねえ……さつさと亀頭を刺激して射精して欲しいなあ。そうでないと、俺が楽しくないんだ」  
「そ、そんなあ……」

でも……お、お兄様を……ま、待たせるの、わ、悪いことですう♡  
「が……頑張つてえ……ち、チンポ扱きい……お、覚えなないとおつ♡」

「んん……んんふうつ♡ んんふうつ♡ んんんんん……くうんんん♡ し、シコシコお……き、きつ、キツいひひ♡ も、もつとお……し、し、しないとお……い、イケないんですかあ？」  
「さあ？ 俺は美奈斗じゃないから、チンポの具合なんて分からないよ」

意地悪ですう……で、でもお、お、男の人は……こ、こんなのお、こ、越えて……絶頂お、し、してるんではないか……

「んんひひ♡ き、き、キツ……いですううつ♡ んんふうつ……て、手があ……と、とま、止まっちゃいますううつ♡」

「しよがないなあ……我慢できる？」  
「うう……うう……うううう……し、しま、すうう♡ が、我慢……し、しますうう♡ だ、だからあ……んんあおつ♡ い、いが、イカせてえ……く、下さいい♡」

私はお兄様の身体にしがみつきました。もう、自分のプライドとか、気持ちとか、そんなの構ってられないです。  
お兄様にしがみつかながら……これから登ってくる絶頂感に耐えなくてはいけなのですから。

「んんあううつ♡ んんあううつ♡ んんんんんん♡ んんひひ♡ んんひひ♡ んんひひ♡」

「どう……来てる？」  
「ううああああうう♡ んんんんくうううううううううう！ す、す……凄いの……き、きてえ……きてますうう♡」

お兄様の手によって蹂躪される……私の……ち、









「うん……ダメ。やつぱりさあ……可愛いふたりつてえ、こーやっていじめたいじゃない。ほら、熱いでしょ……俺もすっごく熱いんだ」

その言葉に偽りはありません……で、でもお、でもお……こ、こんなのお……し、しちゃあ……しちゃあ……だ、ダメですうっ♡

「どうして？」

「んんんふうっ♡ くうんんんんっ……く、癖に、癖に……な、なっちゃんうっ♡ わ、私い、私い……お、おに、お兄様に……こ、こんなことお……し、してえ、ほ、欲しくなっちゃんうっ♡」

「いいよ……美奈斗なら、ホント……いいんだよ。好きなだけ、して上げるからね」

「うう……ね、姉さんにもお、お、同じことお、い、言ってるう……」

「そ、そんなことお……な、無いぞ、うん」

んもお……お、お兄様のお……変態さんっ。でもお……いいっ♡

姉さんもお、私と同じくらい……お兄様が好きなんだもの。しょうがないよ……でも、今は。

「今は……私だけ……私だけのお、お兄様でえ……い……てくださいいっ♡」

「当たり前じゃん……ふふふ、じゃ、チンポ同士のエッチでイカせちゃうぞ」

「んんんんああっ♡ い、いやあ……だ、ダメですうっ♡ こ、こんなのおお……き、き、き、気持ち……い、良過ぎい、ま、ますううううっ♡ ふううっ、んんんんんんっ♡」

ち、チンポ同士のエッチい……き、気持ち良過ぎですうっ♡ す、すっごい、ジンジンさちゃううんですううっ♡ こ、こんなのお……こんなのお……い、いいに決まっていますう……

「お、おに、お兄様もお……お兄様もお……い、いいんですかあっ♡ こ、これえ……こんなに変態じみてるのに……いいんですかあっ♡」

「当たり前だろ……好きじゃ無かったら、こんなことお、しないって」

「で、でもお、き、気持ちいいのお……そ、そんなに、感じないんじゃない」

「俺が感じているのは……熱だよ」

「熱……何です？ 熱って……」

「体温……美奈斗が感じていることで、たぎっている熱だね。それが……ここにダイレクトに伝わってくるんだ」

そう言ってお兄様は、自分のチンポで……私のチンポを「ベチッ♡ベチッ♡」つてえ……叩くんですう♡ んあああああああああ！ だ、だめえっ、そ、そんなあ、そんなあ、し、刺激い……だ、ダメですううっ♡

「んひいっ♡ そ、そんなのお……んんあうううう……あ、熱い、ら、らめええっ♡ んくひいひい……い、いいいっ♡」

「ね……分かるでしょ。もつと分からせてあげるね。ほら……」

そうして、お兄様は私のチンポの上にぴたりと自分自身を乗せてさちゃうんです♡

「うああっ……だ、だめええっ♡」

「ダメじゃないよ。じつとして……そうすれば、分かるよ」

そう言ってお兄様は、私と指を絡めます。私は身じろぎもできず、ただ、自分の一番敏感な場所に乗りかっているモノを感じるだけです。

「ん……んああっ♡ あっ♡ ああっ♡」

「分かってきたかい？」

「ん……どつくんどつくん、し、してえ、してるう……わ、分かりますうっ♡」

「そうそう……分かっただろ」

鼓動……それが、こんな場所でも感じてしまうなんて、何だか不思議なことです。

関心と、感動と、興奮が、ない交ぜになった気持ち。……こんなのお……ちよ、ちよっとお……意外な気分。

「ま、そんなのは、どうでもいいな……今は、気持ちいいこと優先だな」

「あ……んんへえええっ♡ ら、ら、らめええっ♡ ごりいっ……つてえっ……だ、だめえっ♡」

「まだゴリゴリされるのは早いかな……じゃあ、こーやってグチュグチュしていいこうね……」

お兄様は、私の吐き出した粘液を擦り付けながら、私の快楽を高めていくのです。

お兄様の熱さと、チンポを動かされる感触に、二度目の絶頂へと向けられていきます。

「こは、美咲と一緒にだ。気持ちいいと汁の量が多くなる」

「そ、そんなのお……い、いわ、言わないでえ……んんへえええっ♡ ら、らめええっ……ぐ、グニグニユつてえ……♡」

「これだけ濡らせば十分だな……俺のチンポでヒン剥いてやるからな」

「む……剥く……つてえ……んんんあああああああああああ……♡ ら、らめええ♡ んおっ♡ ら、らめええええっ♡ んんんおおおおおおおおおおおおおっ♡」

ざりゅざりゅ……つてえ、い、いや、いやらしい感触で、私の中で新しい興奮が生まれてきます。

射精感と似たような気持ちいいのが……私のチンポに膨らんできます。

「ほらあ……剥けた。さすがにさっき射精したばかりだから、射精までは……でも、かなり気持ちいいだろ？」

「は、はいいっ♡ す、すっごい、で、ですうっ♡ んんふうっ……んあううっ♡ ぴゅっぴゅつてえ……さ、先汁う、いっばい……で、出ちゃったですうっ♡」

「ふふふ……そうそう。そうやってお漏らししたのが……こーやって気持ちいいことになるんだよ」

「んひいひいひいひいひい♡ ら、らめええっ♡ そ、それえっ♡ そ、それえっ♡ それえっ♡ んにゃあああああああううっ♡」

す、すっごいっ！

すっごいですう……こ、これえ……これえ……な、何ですかあっ！ あ……ああ……く、クリトリスう……い、いい、弄ってるみたいでえ……す、すっごい♡

で、でもお……も、もつとお、すっごい♡ だつてえ……だつてえ……あああ♡ ち、チンポのお、





「授業受けないと、単位が危ないんでしょ……特に姉さんは……」

「んにゅう……そ、そういうことお、言われるとは思わなかったよお」

「私は、姉さんよりも出席率がいいんです。それに、委員会活動で点数も稼いでいますから」

「んにゅうあ、狡いなあ」

「な、何がですか!」

「委員会活動お、私物化しているう……にいにいとお、放送室でえ、エッチしているう」

「顔が赤くなっているの分かります」

でも、そんなの、お兄様が話さなければ。

「ごめん……つい、喋っちゃった」

「お、お兄様!」

「しっ! 幾ら目立たない場所でも、そんな大声出したら先生が出てきちゃうよ……」

「で、でもお! そ、それに、ね、姉さんには関係ない苦です。私とお兄様が……その、何処で性生活しようか」

「んにゅうあ……別に美奈斗ちゃんを怒らせたいんじゃないよお……ただ、あ、狡いなあ……」

「んもお……ど、どうしたいんですか、姉さんは!」

姉さんは、モジモジしながらお兄様の方を見る。んもお……また、お兄様の仕業なのね。

「ち、違うって……最初に言い出したのは、美咲だよ。今回は違つて俺じゃない」

「んにゅう……にいにいのお、意地悪う♥ 美奈斗ちゃんを可愛がりたいのはあ、にいにいだってえ……一緒にやないい」

「か、可愛がるって……な、何のことですか」

「分かっている癖に……やっぱり美奈斗ちゃんは狡いなあ……むう」

わ、分かっている癖で……分らないから聞いているのに、んもお、姉さんのバカ。

「簡単なことだよお……エッチい、したいのお♥」

「え、エッチ……こ、ここでえ?」

「だ、だってえ……ほらあ、私とにいにいでえ、美奈斗ちゃんとお、すごいエッチしてからあ……私、のけ者なんだよお……狡いよお♥」

そんなことお……い、言われてもお……

すると……姉さんは、お兄様に目配せしました。何をするつもりなのか、と思つたら、いきなり私の唇を奪つてきたのです。

「んんふうう……んんふうつ♥ んんくうんんつ……ね、姉さん……な、何を」

「うふふ……美奈斗ちゃんを可愛がるのお♥ にいにいとお、どんなエッチしてるのかあ……知りたいからあ♥」

「そ、そんなのお……ね、姉さんっ! だ、ダメですう……やあつ♥」

姉さんはスカートの前を捲ります。パンパンに勃起したチンポがパンティを押し上げていました。

「んにゅう♥ いやらしいでしょお……これえ、朝になるとお、すごい勃起して痛いんだよお♥ 美奈斗ちゃんはお、にいにいとお、エッチしまくっているからあ……平気だよねえ」

「そ……そんなことお……」

ありません——わ、私だって、朝勃ちぐらいしちやいます。ただ、お兄様がいるからあ……すぐにエッチされて、鎮められちゃうだけで。

「美奈斗ちゃんと違つてねえ……私は、いつも学校で処理して貰うんだよお♥ にいにいのお、便所奴隷だからあ……男子トイレでえ……いっぱい処理して貰うのお♥」

「そ、そんなのお……い、言わないでえ……」

想像すると……や、やだあ……こ、興奮するう♥ だ、ダメよお! ね、姉さんが……そんな状態になっちゃうのお……感じちゃうあ。

で、でもお……お、遅い……だ、だめえつ♥ ぽ、勃起い……し、しちゃううつ♥ んんんあああああああつ!

「んんんああうつ♥ 勃ちちゃったあ……ダーメえ♥ 隠そうとしてもお……ダメだよお♥ お姉ちゃんの話聞いてえ……興奮しちゃった?」

「ううう……ね、姉さんのお、い、意地悪う」

「んにゅう……ごめんねえ。もつとお、普通にエッチしたいけれどお、私い、もお、変態さんだからあ……すごいいいやらしくないとお……興奮しないんだ

よお♥

そ、そんなことお、い、言われてもお……

「んにゅうあ♥ にいにいに、ふたなりメスチンポでのお、エッチい、見せようねえ♥ にいにいもお、見たいでしょお?」

お兄様は黙つて頷く。その辺にあつた椅子に腰掛けて……私と姉さんの情事を眺める。

「んにゅうあ……美奈斗ちゃんのお……私と同じぐらいなんだねえ♥ やっぱいい、双子だからかなあ?」

皮もお、エッチなぐらい弛んでるのかなあ?」

そ、そんなのお……わ、分かりません。ど、どんなのがあ……せ、正常なのか……そんなのお。

「んにゅう……にいにいのお、毎日エッチしてるのに、分らないのお?」

「だ、だってえ……わ、私たちのお、お兄様のお、ち、違うからあ……こ、これでえ、せ、正常じゃないの?」

「立派なあ、包茎チンポだよお♥ いじめられちゃうんだよお……包茎チンポだよお♥ にいにいに、いじめられなかったの? ゆるゆるの皮の中に、指とか挿れられて、亀頭の中あ、コネコネされちゃったりい……皮だけ指先で引つ張られてえ、グリグリしたりい?」

「……な、無いですう」

お兄様つたら、苦笑しているう。

姉さんには、結構意地悪なことお、してるんだあ……ちよ、ちよつとお、酷いかも……

「んにゅううつ! んじゃ、美奈斗ちゃんはお……チンポ舐けえ、されてないんだあ。にゅう……んじゃ、お姉ちゃんが舐けてえ、あげるねえ……うふふ♥」

「ね、姉さん……ちよ、ちよつとお……そ、そんなことお」

パンティを押し上げているチンポの先つぽを、姉さんは押しつけてきます。そこは、敏感になつてい……裏筋の所お。



「んああううっ♥ だ、だめえっ……ね、姉さんんっ♥  
「そ、そんなのお……き、気持ち……よ、良くなっ  
ちやううっ♥」  
「んにゃあ……だからあ、いいんだよおっ♥ チン  
ポお、いっぱいいい、気持ちよくなつてえ……お姉ちゃんに、美奈斗ちゃんの恥ずかしいの、見せて欲しいよ♥」  
「そ、そんなあ……だ、だめえっ♥ んあああつ  
……ご、ゴリゴリしちゃあ……で、出ちやううっ♥  
し、汁う、出ちやううっ♥」

でも、私よりも先に姉さんの方がいやらしい汁を  
滴らしてました。そのヌルヌルしたのが……私の  
パンティにも染みついてきて、何だかいやらしい気  
分になってきちゃうんですっ。

「んにゃう……美奈斗ちゃんのお、皮むき慣れてな  
いからかなあ……全然先汁出てこないよお」  
「美奈斗の先走り汁って、美咲と同じぐらい、いつば  
い出るんだぜ……皮剥いてやらないと、分らない  
んじやないか」  
「お、お兄様あつ！ そ、そんなのお……」  
「そっか！ んじゃ、えへ……えいっ♥」

姉さんは……私のパンティの前を引つ張りました。  
抑え込んでいたモノが無くなつてしまつたチンポが、  
身体に叩き付けられる勢いで現れます。

「んああううっ♥ んふうっ……くうんっ♥ だ、だ  
めえ……ち、チンポお……こ、こんなところでえ、だ、  
出しちゃあ……ああっ♥」  
「んにゃあ……可愛い♥ しやぶりたくなつちゃ  
うよお……でもお、にいにいに、怒られちゃうからあ  
……ゆつくりエッチしてあげる♥」

そう言つて姉さんも、自分のチンポを剥き出しに  
します。そのまま、私のチンポに自分のチンポを押  
しつけて……クチュクチュと責め立てるのです。

「んあああああつ♥ だ、だめえっ……そ、それえ  
……それえ、だ、だめえっ♥」  
「ねえ……気持ちいいでしょお？ にいにいに、よく  
いじめられたんだよお……美奈斗ちゃんもそうで  
しょお？ うふふ……これえ、すっごいいやらしい  
よねえ♥」

「だ……ダメですうっ……こ、こんなのお、お、女の  
子が……し、していい、え、エッチじゃあ……あ、  
ありませんよおっ！」  
「うふふ……だからいいんだよおっ♥ 私たちみたい  
に、変態姉妹がするのにはあ、すっごく……具  
合がいいんだからあ♥」

こ、こんなのお……く、癖になつたらあ……ど、ど  
うするつもりなのでしょう。た、ただでさえ……お、  
お兄様にい、い、い、意地悪……されてえ……気  
持ちよくなつちやつてるのにい。  
ううう……こ、困りますう。

「いいんだよお……気持ちいいのがあ、正義なんだか  
らあ♥ んにゃあ……ほらあ、先つちよでえ……ク  
チュクチュしちゃうよおっ♥」  
「んんぎひいっ♥ だ、だめえええっ♥ んんあ  
あつ♥ んあああつ♥ だ、ダメですううっ♥ そ、  
そんなのお……き、きも、気持ち……いい……  
のおおっ♥」

私はあつさり姉さんの言葉に折れていました。  
そうです……気持ちよくて何がいけないのでしょ  
う。確かに恥じらひはあります。  
でも、お兄様が何もかも許してくれている状況で  
……何を恥ずかしがる必要があるのでしょうか？

「そうだよお……さあ、腰動かして……チンポお、剥  
きつこお、しようねえ♥」  
「んんんんんっ……んあううっ♥ ね、ね、姉さん  
……んふうっ♥ こ、こ、こんなのお……こんなのお  
……す、すご、凄すぎるうっ♥」  
「んにゃう……私は慣れちゃつたから、それほどでも  
無いけどお、美奈斗ちゃんは初めてなんだよねえ♥  
んじゃ、こんなに先汁う、トロトロ口になつちやつ  
てもお、しょうがないよねえ♥」

私と姉さんの先走り汁は、すっごい量になつてい  
ました。私の方が多いのですが、口では平気なよう  
なことを言っている姉さんだつて、その量は尋常で  
はありません。

「んにゃああううっ……だ、だつてえ、だつてえ……  
き、気持ちいいとお、いつばいいっぱいい、で、出  
ちやうんだもんっ♥」

「ん……んふうっ……む、剥いたらあ、な、中に溜まっ  
ているの……」  
「うん♥ うんっ♥ いっぱいいい、出ちやうよお……  
いっぱいいいっぱいい、滴つちやうよおっ♥」

私のも、姉さんのもの、ちつとも剥けている状態で  
は無く、先端の弛んでいる部分を互いに弄んでいる  
……そんな感じです。

「んにゃあ……にいにいがあ、もどかしく思つてい  
るかも知れないからあ……一気に剥いちやうよおっ」  
「え……あ……そ、そお、あ、合わせればいいのね……  
あうう、こ、こんなあ、剥かれ方……は、初めて  
かもおっ♥」  
「んじゃ、気持ちよすぎて……壊れないでねえ♥」

そう言いながら、弛んでいる先端同士がクチュク  
チュと……キスを交わします。又ジュ又ジュした中  
で「こりいっ♥」つて激しい衝撃。  
私は声も出せず、姉さんから腰を引いてしまいま  
す。

「んにゃあ……チンポのお先端、擦つちやつたあ？」  
「い……痛い……こ、こんなのお……」  
「オチンチンの口い、すっごい敏感なの。だからあ、  
あんまり擦らないようにい、しないとお……大変だ  
よお」  
「も、もつとお……早く言つて下さいい……ひ、ヒリ  
ヒリするう」  
「んにゃあ……じゃあ、ちよつと剥いてから、ゴリュ  
ゴリュつてえ、しようねえ♥」

姉さんの言葉に従つて、ちよつと先が見えるぐら  
いだけ、皮を剥いてから、クチュクチュと押しつけ  
合いつこします。

チンポに快感が走つて「びくんっ♥」つて痙攣す  
ると、どちらの先走り汁か分からないですけれど  
……溜まっていたのが、糸を引いて滴り落ちていき  
ます。

私と姉さんの吐息と喘ぎしか聞こえない廊下に、  
ぴちゃんっ♥ つて……小さいけれど、いやらしい  
卑の音が響くんです。

その小さな音でさえ、私を興奮させてくれます。そ  
う……私たちは決して正しい行為をしているわけ  
じゃないっていうことを、知らしめているのです。

「んにゅう……もつと、ゴリユゴリユしないとお、お姉ちゃん、射精できないよおっ♥」  
 「だ、だってえ……こ、こんなのお、わ、私の方が……耐えられないですよ」  
 「にやあ……そうだねえ。私い、にいにい、舐けられちゃつてるからあ……うふふ♥」  
 「そ、そんなのでえ……じ、我慢しないで下さいい」  
 「にやあっ！ いいじゃないい……美奈斗ちゃん、正室なんだよー。奥さんなんだよー。わ、私なんかあ……側室でも、愛人でもなくてえ……奴隷なんだからあ♥」

それは聞いていますし、分かっているつもりです。でも、お兄様が、私よりも何かを施したっていうこと……それが私の中の小さなしこり……なのです。

「にゅう……その顔は、納得してないなあ。いいよー、お姉ちゃん……美奈斗ちゃんに蔑まされるようなことお、しちゃうからあ♥」

そうして、姉さんは私から離れます。

私は、いきり立ったモノをどうしていいか、分からないまま見つめています。

「んにやあ……にいにい♥ まだあ、今日はしてないよねえ……」  
 「してないって……何が？」  
 「日課あ……私い、お便所なあ、日課してないよねえ♥」

「ああ……そうだな。こでししたいのか？ いつもの便所じゃなくて」  
 「うんっ……こでえ、したいよお。してみたいよおっ……美奈斗ちゃんに見て貰いたいのお♥」

「ふーん……まあ、いいか」

そう言ってお兄様は、立ち上がって姉さんの前でズボンのファスナーを下ろしました。

それから……チンポを取り出します。

まだ、勃起していないチンポは……大人しうに見えます。あの凶暴そうな雰囲気は、やっぱり怒張した時だけなのでしょう。

柔らかいチンポを姉さんは、口に含みます。そして……お兄様は――

「今から、小便を飲ませてやるんだ」

と、にやつきながら私に話しかけました。知ってはいました。

そうやって姉さんが、私とお兄様の間に……いいえ、側に近づきたいと思っていたのも、ふたなりになつて、もつともつと恥ずかしい姿を見せて、お兄様を喜ばせようとしたのも、全然話が違うのです。でも、それを何もかも見るのは、

「だ、だめえ……お、お兄様も、姉さんも止めて。そういうの……良くない。か、身体にだつて……わ、悪いし」  
 「そういうので、美咲が満足すると思うか？」

姉さんの視線――「黙って見ていなさい」  
 私は、その死せとお兄様の言葉に従うしかありませんでした。

「出すぞ……」  
 「んふうっ……んぐうっ♥ んふうっ……ふうんんんっ……ん……ごくうっ♥ ごくうっ……ごくうっ……ごくうっ♥」

喉を鳴らして姉さんは、お兄様の小水を吸っています。こ、こんなおつてえ……こ、こんなおつてえ……だ、だ、ダメ……や、やめてえ。

「んふうっ……んにやあ……もお、終わりのい？」  
 「そんなに留めてなかったんだ。それに、今日は美奈斗との約束があつたからな」  
 「んにゅう……今日もお、美奈斗ちゃんのお」  
 「お前は俺の奴隷なんだから、黙って俺の言うことを聞いておけばいいの……分かった？」  
 「はーいっ♥」

ニコニコとしている姉さんを見て、私は、私が分かつていなかったことがありました。

姉さんはこれで、幸せなのです。  
 そう……私のように、お兄様のために何かをなさなくちゃいけないひとじゃなくて、ただそこにいれば幸せな人なのです。

「んにやあ……美奈斗ちゃん、どうしたの？ 神妙な

顔でえ……えへへ♥ もしかして、びっくりしたあ？ にいにいのお、おトイレえ……してるの？」

「え、ええ……驚いた。見たのは初めてだし……」  
 「んでえ……チンポお、手扱きしてるんだあ♥」  
 「え……あ……それは……」

知らない内に、私は自らを慰めていました。もつとも、姉さんが言うほど救いわけではなく、イジリ回すような感じで……

「うふふ……よく神社に遊びに来る男の子みたいにい、チンポ弄つてらう♥」

「そ、そ、そんなのお……し、知りませんっ」  
 「男の子の性の目覚めつてえ、こつやつてチンポが反応しちゃつてえ、弄りだしたら始まるんだつてー。美奈斗ちゃんもお、チンポイジリが好きになつてきたー？」

「そ、そんなのお……」  
 「んにやあ……いいんだよお♥ 後でえ、もつともつとお、気持ちよくしてあげるんだからあ♥ でもお……今日はこでえ……いっぱい射精するの♥」  
 「しゃ、しゃ、射精い……」

そうして姉さんは、私の下半身に自分の下半身を寄せてきました。さつきと同じ体勢ですが、向きがちよつと違います。

「な、何を……」  
 「壁にい、マーキングするんだよお♥」

「ま、マーキングう？」  
 「そうだよお♥ 牡犬のお、縄張りみたいにい……おしっこじゃなくてえ、チンポ汁でえ、しちゃうんだよお♥」

「そ、そんなのお……で、できませんっ！」  
 「できるつてえ……ねえ、にいにい♥」

お、お兄様にい、きよ、許可なんか……求めないでえ……そ、それ言われたらあ……

「ああ、美奈斗もやつてご覧。上手くできたら、ご褒美……してあげるね」  
 「んにやあ……私はあ、にいにい？」

「美咲にも、同じご褒美をしてあげる……楽しみにしているんだよ」









授業終わっちゃうわよ。こんなのお、人に見られ  
たら……困るう」  
「そうだな……」

お兄様が来ます。私の姉さんの間に入って、優し  
く肩を抱いてきます。

「んあうっ……お、お兄様あつ♡」

「美奈斗は少ししたりないみたいだな……じゃ、次の  
授業もさぼるといこと」

「そ、そんなぁ……こ、こういうお……よ、よくあり  
ませんよ」

「そうか？ でも、このご褒美を貰ったら……もう少  
しエッチしたくなるろ」

「んにやあ……ご褒美♡ にいにい、ご、ご褒  
美……ちよ、頂戴い♡」

姉さんは嬉しそうに、お兄様の股間をさすって  
ました。私たちの痴態を見ていたせいでしよう、股  
間はパンパンに隆起して……あの大きなチンポの存  
在感を明らかにしているのです。

「んじや……ご褒美だ。まずは、美奈斗からな」

私は、何をされても驚かないつもりでした。でも、  
お兄様が……私の足を、股を捕まえた状態で……  
しゃがみ込んで……

「そ、それはあつ！ だ、だ、ダメええつ！ お、  
お兄様あ……お、男の人なのにいっ！」

「あれ？ 美咲は大喜びだぞ」  
「んにやあ……ち、違うよお。わ、私だってえ、は、恥  
ずかしいしい、いにいにいのお、や、やりすぎなんだ  
よおつ……でもお」

姉さんは、情事に酔っている顔をします。  
興奮が姉さんの中を支配しているのでしょうか。  
姉さんは、生唾を飲み込みながら……私に話しか  
けてきます。

「すっごい、気持ち……いいんだよお♡ チン  
ポ……しゃぶられるの♡ だつてえ……に  
にいだよお♡ 男の人だよ……それがあ、女の  
子のチンポしゃぶって……チンポ汁まで飲んでくれ  
るんだからあつ♡」

「そ、そんなのお……だ、だめえ……わ、私い、こ、こ  
わ、壊れちゃうっ」  
「いいんだよ……美奈斗。可愛い美奈斗……壊してあ  
げるね……」

そうして……お兄様は、私の股間に顔を寄せます。  
腰は……引けません。引きたかったのに……どうし  
たわけか、引きたくないと思っている私がいるので  
す。

「美咲より、ずつとずつと堂々としているね……  
さあ、しゃぶってあげる」

「やあ……だ、だめえ♡ んんひい……んんん  
ふうう……くうんんんん♡」

お兄様の舌が……私の恥丘からゆつくりと、チン  
ポへ……陰茎へと進んでいきます。でも、それは、も  
どかしい感触です。

ダイレクトに……ずばお♡ つてえ……気持ち  
いいこと、期待していると……全然違います。

「こ、これえ……な、何いっ……ち、違うう」

「あはは……当たり前だよ、美奈斗ちゃん。ちゃん  
とお、フェラチオするんだつたら、男の子を楽しま  
せなくちゃ……いけないんだよお♡」  
「え……あ……あああ♡ んふうう……くうん  
んんんん♡」

陰茎の膨らんだ場所に、舌が触ります。そのまま、  
つうつ……と、舐められると、身体中が栗立って  
しまうほど、気持ちがいいです。

「だ、だめえ……お、おに、お兄様あ……こ、こんなあ、  
こんなあ、せ、責め方あ……や、や、ですう♡  
も、もつとお……つ、強いのお♡」  
「ふふふ……いいのかな？」

「い、いいですう♡ は、早くう……早くう……ち、  
チンポあ♡ チンポしゃぶってえ♡」  
「もう一回言うんだ」

「あ……ああ……みな、美奈斗のお……美奈斗  
のお、へ、変態ふたなりチンポお……な、なめ、舐  
めてください♡」

「俺にか？」  
「そ、そう……ですう♡ おに、お兄様にい、こ、こ  
の、臭くてえ……き、汚いのお、しゃ、しゃぶって

いただけたらあ……す、すっごくう、う、うれ、嬉  
しいですう♡」  
「しょうがないなあ……」

そうして……お兄様は、私のチンポを口に含んで  
くれたのです。そのまま……ちゅっ♡ ちゅっ♡  
ちゅっ♡ つてえ……あああああ♡

多分、この時……いいえ、さっきの合詞を口にし  
ているときから、それはそれははしたない顔で喜ん  
でいたことでしょう。

そして、私は……すぐに、今日二度目の射精を……  
愛して止まない兄の口の中で行ってしまったのでし  
た。



教会の夜——私と姉さんが、まぐわっている最中  
です。

「んにやあ……いいい♡ 美奈斗ちゃんのお  
……穴♡ すっごい♡ いいよお♡」

「ね……姉さん♡ んふうう♡ ぐうんん  
ん♡ わ、私も、いい♡ いいですう♡」

お兄様は、私たちの痴態を眺めています。  
お兄様の……望みを叶える、そう私が決めたので  
す。

そうです。お兄様の望むとおり……姉さんと同じ  
ように、お兄様の望むとおり、になろうと思つたわ  
けです。

「んにやあ……美奈斗ちゃん、可愛い♡ こんな風  
に、エッチい、いっばい、していたのお♡」  
「そ、そうですう……んふ♡ んんくうううん  
ん♡ うああ♡ ね、姉さんのお……か、硬  
い♡」

「んにやあ……だつてえ、美奈斗ちゃんの中あ  
……ケツ穴あ、しゅっごくう……気持ちいいんだも  
ん♡」

「そ……そんなのお……い、言わないでえ……は、恥  
ずかしいですう♡」

お兄様とのセックスとは、全然違うセックス——  
お兄様は私や姉さんの手首並みに太くて……そし  
て、長いので……挿れられた直後は、本当に辛いので

です。  
でも、姉さんのは……もしかすると、大きいのでしようけれど……お兄様のモノほどじゃないので、何だか安心して……犯されるみたいな気分です。

「んんにゃあ……美奈斗ちゃんのお、お、お尻い、ヌルヌル……すっごいねえ♥」  
「そ、そんなのお……か、感心しないでえ……は、恥ずかしいですうっ♥」  
「だってえ、オマンコよりい、濡れてるんじゃないの……スケベ過ぎだよおっ♥」  
「そ、そんなことお……お、お兄様にい、ちよ、ちよ、調教されたからですう……うううっ♥」  
「調教はしてないよ。単に普通にハメただけ……まあ、元々美奈斗はケツ穴でイケちゃうぐらいのスケベだからな」

顔が熱くなります。  
お尻を……姉に犯され。  
それで……感じて。  
それを……兄に指摘され。  
なのに……私は、すっごく興奮している。

「んんんんにゃああああああっ♥ ら、ら、らめええっ♥ み、美奈斗ちゃん……し、締めちゃあ……やだよおっ♥ も、もげちゃううううっ♥」  
「あ……ああ……ごめ、ごめんなさいい……こ、興奮しちゃって……んんふうっ♥」  
「美咲のを感じ過ぎなんだよ……美奈斗の、その穴は、指が四本ぐらい入るぐらいなんだからさあ」  
「お、お兄様あつ！ そ、そんなことお……い、言わないでえ……下さいいっ♥」  
「あはは……まあ、いいじゃないの。本当のことだし……でも、実際よく締まるいやらしい穴だっことは、俺のチンポが分かっていることだからね」

んもお……お兄様のおバカあつ。  
姉さんまで二や二やしちゃうってえ……ううう……は、恥ずかしいじゃないっ♥

「んにゃあ……機嫌直してよお、美奈斗ちゃん♥ 私い、美奈斗ちゃんも、気持ちよくないとお困るよおっ♥」  
「そ、そんなあ……ね、姉さん。い、いいんですよお……わ、私は……その、お、お兄様のお、物の言い

方が気に入らなかつただけで……ね、姉さんが楽しんでくれれば……」  
「んにゅう……だからあ、もつとお、気持ちよくなつて……ねえっ♥」

ちよつとだけ姉さんには悪いと思っている。  
私は……ここで、姉さんを突き放そうと思っているからだ。  
私は……お兄様に選ばれた。  
それだけははつきりさせなくちゃいけない。  
だから、こうやって……お兄様の前でセックスしているのは、お兄様への意思表示だ。  
私は姉さんの立場も内包する——便所奴隷であろうと、何であろうと、私は……お兄様の妻なのだから。

「うふふ……姉さん♥ じゃあ……もつとお……気持ちよくしてくださいねえ♥」  
「んんにゃああううっ♥ だ、だめえっ……し、締めたらあ……う、動かせないよおっ♥ ら、らめえっ……な、中でえ……グーユグーユ……し、しちゃう……んんにゃあああああっ♥」

姉さんを私は締め付ける。  
姉さんの与える快楽は快楽であり、私はそれを黙って受け入れてもいい。  
でも、私は姉さんを逆に責める。  
そうしないと……私の中の「何か」が納得してくれないからだ。

「んにゃああううっ……み、美奈斗ちゃん……ど、どうしたのお？ きよ、今日はあ……激しいよおっ♥」  
「そんなこと……無いですよ。私は、私、同じですつて……」

そう言いながらも私は、私がイクまいと思いがら、姉さんのチンポだけを扱っていく。  
姉さんが「奴隷」なら……私は、今の私はただの「モノ」であるべきだ。  
そうでないと……私の居場所は、ここには無い。姉さんとお兄様の間には、私は無いのだから。

「んんにゅう……美奈斗ちゃん、気持ちいいのお？」  
「え、ええ……気持ちいいですわ……本当ですよ」

姉さんの腰の動きは、お兄様に比べて、全然稚拙です。でも、私を気持ちよくしようとしている心は分かります。  
私は、それを無視しているだけで。

「ほ、本当に……？」  
「ええ……見れば分かるじゃないですか。私は……いつもの私ですよ？」  
「……違う」

姉さんは、そう呟きました。  
そして、私の唇に自分の唇を重ねます。  
一瞬、私が閉じこめていたモノが沸き出しそうになります。それを目を瞑って、押し込めます。

「ほら……違う」  
「そ、そんなこと……」  
「んにゃあ……美奈斗ちゃんは、美奈斗ちゃんであつて欲しいなあ♥」  
「わ、私は……私のままですよ……」  
「違う。今の美奈斗ちゃんは違う……もつと気持ちよくて、もつと楽しそう……もつと嬉しそうじゃなくちゃ……美奈斗ちゃんじゃないよお」

私の首に姉さんの腕が巻き付きます。  
私は、つい視線を逸らせてしまいました。

「んにゃあ……どうしたのかなあ。やつぱり……にいにいとのことお、怒っているのかなあ？」  
「そ、そんなことは……」  
「ううん。怒るのが普通だよ。私だって怒るよ……だってえ、嘔吐しているんだもん」

違う！ それで……怒っているわけじゃありません。違うんです。

「でも……嘔吐してるよお」  
「そ……それは……」  
「んにゃあ……じゃあ、どうしてえ……？」  
「そ……それは……」

分かっている。  
分かっていること。  
私は姉さんのようになれない……それだけ。  
姉さんが……羨ましい。



私は自分のことを考えた。だから、お兄様が子供を欲しいといつても拒絶した。でも、本当はお兄様の言いなりになりたい。姉さんのように……ただ、性のオモチャのように……ただ、快楽を貪りたいって。

「……それは、違うよ」

「え……ね、姉さん……なんて」

「違うって言ったの。私、できてないよ……そういう風にはできていない」

「だって……し、してるしい、わ、私の前でも……したじゃない」

「んにゅう……それはねえ……好きだからできるんだよお♡」

好きだからできる——そういうものだろうか。ああ、そういうものだ。

「そうだよ。でも、私が好きなのは、にいにいだけじゃないよお……私は、美奈斗ちゃんもお……好き♡」

「ね、姉さん……」

「あのね……私だって、本当は、全部できているわけじゃないよお。でもお、にいにいが好きだし……にいにいのことなら、何だってできるって思っているの」

「……」

「それからね……私、やっぱり美奈斗ちゃんとも、にいにいとも、お別れしたくないの……でも、邪魔もしたくないの」

「……姉さん」

「邪魔しないように、でも、一緒にいられるように……って思ったら、すっごくバカなこと、にいにい……」

「……それなら、お兄様はそのバカな提案をあつさり受け入れてくれたのだ」

「うう……意味で悪いのはお兄様だろう。でも、私も姉さんもお兄様を恨むことはできない。私たちは好きで……お兄様を好きだから、こうなってしまうのだ」

「だから……美奈斗ちゃんに恨まれたり、憎まれたりするの……しよがなないけど……できれば、この……この……エッチの間だけでも、そういうこと……」

……忘れて欲しいんだ」

「……バカね、姉さんは」

「んにやあ？　ば、バカなのは……分かってるけれど」

「バカっていうのは、そういう話じゃなくて……うふふ♡　まあ、説明すると私がバカになっちゃうわ」

「んにゅう？」

私は姉さんから離れる。でも、すぐに姉さんのエッチな場所に跪き、そして……快楽を与えるの。

「んにやああううっ♡　ら、らめえっ……み、美奈斗ちゃん……だ、ダメだよおっ♡」

「んふうっ……姉さんってばあ、感じすぎねえ♡　でも、気持ちいいでしょ？」

「んにゅうう……な、ナメナメえ、全然されてないからあ……わ、分からないよおっ♡」

「うふふ……私だって、知らないわよお♡　んん……姉さんのお……可愛い♡　こんな間近で見たこと無かったからあ♡　うふふ♡　んん……」

「んにやあ……美奈斗ちゃんのお……な、舐めていい……いやらしいことお……しよお♡」

「……」

「んんあああああ♡　な、何い、な、舐め……るのお……こ、こんな……いいのおっ♡」

「んにゅう……イッた後お、にいにい舐められるのとお……全然違うよねえ♡　もつともつとお……チンポお、しゃぶる♡」

「わ、私も……んんちゅうっ♡　んんちゅうっ♡」

「……」

「姉妹でのシックスナイン——それも、ふたなりのチンポをしゃぶるっ♡　こんなお……ボーイズラブの男の子がするよう……そんな変態行為。それをお兄様の前でしてる……私たち、姉妹」

「んんくうんんっ♡　お、美味しいよお……こ、これ……癖になっちゃうよおっ♡」

「んにやあううっ♡　私も……これ……これ……いいよおっ♡　美奈斗ちゃんのお……チンポおっ、美味しいいっ……美味しいよ……」

ちゅーちゅーと、私たちは互いのチンポを貪り合います。恥ずかしいっていう気持ちよりも、快楽の方が全然強くて……頭がおかしくなりそうです。

「んにやあ……いっぱい♡　いっぱい……先汁……出るよおっ♡　美奈斗ちゃんも、いっぱい出してよお♡」

「う、うんっ……こんなお……エッチすぎる♡」

「これから……もつともつとエッチしようね。美奈斗ちゃんもエッチしたいよお♡　だからあ……」

「分かってる……分かってます♡　こ、こういうのお……好きだって……やっとお♡　やっとおお♡」

——素直になれました。

自分では、とくに素直になれている……そんなつもりでした。でも、私は、私のまま、何も変わっていないことに、今更気付いたのです。

「んにやあ……ち、チンポおっ……っ、使いたいよお♡　いい、いい……美奈斗ちゃんに、チンポお、挿れたいよおっ♡」

「う……うんっ♡　いいよ……姉さんに、犯されたいよおっ♡」

我慢しきれなくなった姉さんは、悲鳴のような声を上げて、体を入れ替えます。そして、泣きそうな顔を向けながら、もう一度私にセックスをねだるのです。

「んにやあ……美奈斗ちゃんとお、ハメハメえ……したいよおっ♡」

「んふっ♡　姉さんたら……いいですよ♡　セックス……ケツ穴あセックス……したいですよお？　ほらあ……してえ♡」

「……」

私は姉さんの前ではしたなくお尻の肉を広げ、そして粘膜を剥き出しにしています。

でも……それに反応したのはお兄様が先でした。

「美咲、先に俺……いいかな？」

「んにやあ……いいよおっ♡　ふ、ふたりでえ……美奈斗ちゃんハメハメしちゃうの？」







姉さんのストロークが、早く、そして、長くなっ  
ていきます。臀部と姉さんのお腹が「ぱちんっ♡  
ぱちんっ♡」って鳴るほど勢いもあります。

私は、髪をかきむしりながら、この行為に耐えます。でも、ただ耐えることしかできない私には、限界がありました。

それは……お兄様の行為で、あっさり崩壊してしまふのです。

「んじゃ……俺も、しちゃうよ」  
「んんんおおおつ♥だ、だめえつ♥す、すぐにいい、す、すぐにいい、しゃ、射精い、射精い、しちゃいますううつ♥」  
「ふふふ……美奈斗の中がぐんぐん動くよ。気持ちいいんだろ……ほらっ」

お兄様がちよつとでも動く……それだけで、私の中に快楽が、ドツ！と押し寄せてきます。射精感を我慢し、チンポ快楽を我慢していた苦悩の……もお、すぐにい……で、出ちゃうううっ♡

「んんああおおおつ♡ら、ら  
めえつ♡らめえつ♡で、出るうううつ♡

「ん、ちんぽおつ……ちんぽおおつ♥」  
 そんなにいい、そんなにいい、美奈斗ちゃん……そ  
 んなにい、そんなにいい、し、締めたらあつ……お  
 お姉ちゃんちんぽおつ、も、もげちゃうよおおつ♥

姉さんの悲鳴は関係ありません。だって、私の中で快楽は限界に達していたのですから。

「んにやあああつ♡に、ににに、い、イツちゃつてえ……いい？ いい？ んにやああああつ♡  
「わ、私もおつ……私もおつ……い、いき、イキます  
ううううううつ♡」

[illegible]

「んあつ♥んあああつ♥んあああつ♥しゅう  
しゅ、しゅご……いいいっ♥ね、姉さんのお……  
姉さんのおつ……い、いっばいいい……いっばいいい

「……な、流れ込んでえ……き、きてるうつ♡  
「んにゃあつ♡ んにゃあつ♡ んにゃあつ♡」

しゅ、しゅごい……ま、まだあ……勃起い、み、美奈斗ちゃんの中でえ……勃起してられるうつ♡」  
「ふふふ……じゃあ、俺が美奈斗のオマンコを犯してあげるからな。美咲は続けて、ケツ穴射精しなさい……」

お兄様は姉さんを抜かずに、私の中から離脱します。そのまま、オマンコの方にチンポがねじ込まれていきます。

その無茶な行爲に、私は獸のように声を漏らすのでした。

「さあ……今日で美奈斗を孕ませてやるからな。たっぷりザーメンを飲むんだ」  
「は……あはあ……んんんおおっ♡ お、おま、オマンコおっ……ひ、久々あ……お、オマンコおっ♡」

お兄様のチンポが、私の子宮口をギリギリと蹂躪していきます。何度も犯されたのに、この感触を忘れてしまうほど、今の私は普通じゃないセックスに夢中だと思ひ知らされました。

こんなのを……忘れてしまうほど、私って……ずかしいことお、繰り返していたんですう♥

「そうだよ……美奈斗は変態なんだよ。ケツ穴で、何回もイける女の子なんて、そんなにいるわけ無いじゃない。拳げ句、オマンコアクメを忘れちゃうなんて……本当にどうしようも無い変態だなあ」

……く、くださいいっ♡  
 くて、忘れたんじや……んわ、私だつてえ……忘れた  
 ら、らめえ♡  
 ま、まだあ、は、はや、早いのおお♡  
 ……だ、だめえ♡

「んにああ……だ、だつてえ、だつてえ、お、お姉ちゃ  
んチンポお、ま、またあ、勃起してきたもんっ♥  
勃起してきてえ……気持ちいいしいからあ、パン  
パンするもんっ♥」  
「しょうがないなあ……俺はまだイッてないしな  
たっぷりと美奈斗の子袋にザーメンを飲ませてやら  
ない……な」

お兄様と姉さんの責めで、私は快樂の地獄に墮ち

ていきます。

呼吸は止まらず。

口ははしたなく開き舌を突き出して、色

涎も、鼻水も、拭うことなく

も何度とも空撃ちの絶頂で、先走り汁がザーメン以上溢れていくのです。

その中で繰返される縄頂居を  
のチンポに支配されたまま、  
味わい続けていまし  
た。

「ふふふ……いい顔してるよ、美奈斗」

「あ……あ……そ、そんなことお……い、言われても、う、嬉しく……あ、ありませんわ……ん」

ええ。お尻の中に垂れ

「ね、姉さんまでえ……ああくうんんっ♡♡♡」

ふ  
う  
ー  
♡  
  
ん  
ん  
ん  
ん  
お  
お  
お  
ー  
♡  
」

直腸と膣を分け隔てる薄い一枚の肉を挟んで、お兄様と姉さんのチンポが……私の快楽中枢を責めて立っています。

ニリニリと肉壁を削り取られるたび、私はうねるような絶頂感を味わい、牝の体液をほとばしらせていくのです。

「ううう……いいよ、美奈斗お。オマンコお、イッてるのが……分かるよ。子宮まで震えているみたいにするの、すごい感触だよ」

とお……お尻の方までピンピンくるよおつ♡♡ もつ  
ともしとお、気持ちよくさせてあげるうっ♡」

あまりにも繰り返される快楽のため、私は本当にイッているのか……分からなくなっています。私が確かに分かる絶頂感……最初の一瞬だけ。  
ドオンと来る高波の衝撃だけで、後はずっと癡癡と脳を揺るがす快楽の波を受けっぱなしになるのです。

その波は、お兄様と姉さんの緩やかなストロークで、あつという間に平均化され、平常に戻ったよう





く放尿してきました。  
いくら今、公衆便所扱いされているからって……  
いきなりの放尿はとでもきつかったです。  
それでも、私は今の自分の役目を知っているから、それをこなしました。そうする必要があったからです。

「ふふふ……」苦勞様。んじゃ、美奈斗を慰めてあげないとな……可愛い俺の妹、そして、俺の奥さんを「んあうっ……」絶対胎教に悪いですう」  
「そうだろうね。臨月間近の女の子を捕まえて、クラス中の男と輪姦なんて」  
「どうして……こんなことを？」

素直な疑問。  
私にはお兄様と姉さんがいれば、十分すぎる快楽だった。それなのに、お兄様はそれ以上の行為を施した。  
姉さんは、自分がお兄様の奴隷であり、その便所奴隷の役割を実感していたから、十分すぎる施しだったかも知れない。  
でも、私は……ちよつと立場が違う。

「まあ、気紛れ……かな。でも、俺も男だったわけだ……可愛い妹にして俺のモノが汚されるのを、見たくなつた……破滅願望なのかも」  
「んもお……本当に、しょうのない人ですね、お兄様は♡」

別に構わない。  
お兄様以外の男に犯されるのも。  
こんな風に公衆便所として扱われるのも。  
ただ、私と姉さんを、お兄様が愛し続けるなら。

「それは絶対大丈夫。俺はお前たちが好き。大好き。愛している。こんな軽い言葉しか出ないのが……本当に悪いと思っているけれど」  
「じゃあ、言わないで……黙って、態度で示してください」  
「うん、分かった」

お兄様の指が、私のアヌスに差し込まれる。いきなり……三本も。そのままグリグリと、中を掻き回していく。

「綺麗にしないと……美奈斗の中を。その方が嬉しいだろ……俺ので綺麗にしてやるから」  
「は……はい……お、おね、お願いします♡」

男の子というのは、本当に不思議なもので、こういう状況だと容赦が無い。多分、一対一であれば、こんなことは無いのだろう。  
だが、誰かが責任を負い、しかも責任の所在が曖昧にあるような状況だと、こんなにも酷いことができるのだ、と分かった。

もちろん、その中にはお兄様も入っているわけだが……ただ、お兄様はそれでも責任を取る側だから、こんなことをしても許されるわけである。  
もつとも、その責任を追及するのは、私と姉さんしかないのが現状であるわけだ。

「いっばい……出てきちゃったな。こんなに出されちゃったのか……」  
「ま、まだ……で、出てきちゃうとお……そ、そのお……あ、アレまでえ……出ちゃうう」  
「ウンチしたいのか？」

「い、いやあつ！ そ、そんな……こと……あ、あんなに綺麗にしたのに……で、出てくるわけ……無いじゃないですかあ」  
「そっか……じゃあ、やつぱり異物挿入のせいだろうな。便意だけあるって感じだろ……気持ち悪いのか？」  
「うう……ちよ、ちよつとだけえ。お、お兄様のだったらあ……へ、平気なのにい……」

お兄様は、私を再び抱きすくめ、キスをしながら、アヌスをこじ開けていきます。

「美咲に吸って貰おうか？」  
「んっ……お、お兄様のお……変態い♡ そ、それえ興奮するけど……姉さんは……」

姉さん——今、男の子は四人、あ、今、姉さんの髪にザーメンをぶちまけたから、三人になりました。  
ふたりの男の子は、姉さんの口とお尻を。もうひとりの男の子は、四つん這いになっている姉さんの中に潜り込んで……チンポをチュパチュパしています。

何度も、何度も絶頂する悲鳴が聞こえますが、男の子たちは止める気配がありません。それどころか、姉さんのチンポをしゃぶりたがっている子が増えて

きていて、周りでセンズリしながら待ちかまえているような状態です。

「あつ……ああ♡ す、すっごい……姉さん……あんなに……犯されちゃって……」

「さすがにそろそろ限界だよな。あと、一巡したら、全員帰そう。そうでないと、ふたりとも俺が負ぶって家に帰るハメになりそうだ」

「うふふ……さつき気絶したのにおしっこかけて無理矢理起こした人の言葉とは思えない優しい言葉ですね、お兄様っ」

「悪かったな……でも、ふたりとも俺の小水だと思ったら嬉しそうな顔して、ホント……いやらしくなっちゃったよなあ」

お兄様のモノであれば、何だって私たちの快楽に還元されてしまふのです。それを姉さんを通して理解して本当に良かった。

「俺も、ふたりのだったなら、何だって受け入れられるよ……可愛い妹だもの」  
「じゃあ……犯して……ください♡」

私はお兄様にしがみつきます。

そして、キスをねだります。  
お兄様は、それに簡単に応えてくれました。  
それから——他の子たちを帰すことにしました。

後の時間は……私たちだけの時間。  
文句が出たり、無理矢理私たちを続けて犯そうという人が出てくるんじゃないか、と思っただけですが、意外にみんな素直でした。

「当たり前だ。お前たちが丈夫すぎて、結構みんなキテいたぞ」

「ん……あ……そ、そうかなあ。いっばい……いっばい……出されちゃってえ……よく分からなかつたよ♡」

「ん……姉さん……ベトベト♡」  
「ん……あ……い、いいよおっ、な、舐めないでえ……いいよおっ♡ は、恥ずかしいよおっ♡」

「私だって……ほらあ、恥ずかしいことお、いっばいされちゃったんですよ♡」

私は姉さんの手を取り、股間へと導く。  
姉さんはザーメンをよく掛けられていたみたいだ





けれど……私は泣いても叫んでも、お願いしても、容赦なくアヌスの中に流し込まれたのです。

「んにゅう……じゃあ、美奈斗ちゃんの中……私が綺麗にする♡」

「あ……やあ……ね、姉さん……だ、だめえっ♡」

「ふふふ……分かってるじゃないか、美奈斗。そうだ……美奈斗は美奈斗にどっか舐めて欲しいか？」

「お、お兄様……そ、そんなのお……」

「んにゅう……い、いいのかなあ……いいのかなあ？……いいならあ……してえ……欲しいのがあるよおっ♡」

姉さんは泣きそうな顔になりながら、私に訴えかけました。

「ち、ち、チンポお……しゃ、しゃぶってえ♡」

「ね、姉さん……」

「んにゅう……だ、だつてえ、お、男の子たち、最低にへたくそなんだもんっ。美奈斗ちゃんのお、優しくてえ……すっごく気持ちいいんだよおっ♡ だからあ……お願いいっ♡」

私は黙って姉さんにキスしました。

そして、姉さんの下半身に顔を寄せて行きます。姉さんもまた、私のお尻の方に唇を寄せます。

「んにゅうあうっ♡ ま、前のお、しゃ、しゃぶりにこにい、似てるよお♡ いやらしいよおっ♡」

「うふふ……姉さんのチンポお、赤く腫れちゃってえ、酷く舐め回されたのね」

「んにゅうあうっ♡ そうだよお……優しくないんだもんっ、不愉快だよおっ！

「じゃあ、優しくしゃぶってあげるね……可愛そうな姉さんのチンポおっ♡」

たっぷりと唾液を含ませて、私は姉さんのチンポを口を含みました。同時に私のアヌスに、舌が差し込まれていきます。

「んああうっ♡ ね、姉さん……」

「うん……分かったあ♡」

私はジュルジュルと音を立てて姉さんのチンポをフェラチオしていきます。

私が唾液を吸ったとき、姉さんの身体が震え、跳ね上がります。

「んふうっ……ね、姉さん……わ、私のおっ♡」

「んにゅう……味濃くてえ……すっごいよおっ♡ これ……あ、頭あ、ば、バカになっちゃうよおっ♡」

「ふふふ……んじや、そろそろ、俺も楽しませて貰うよ。んじや、美奈斗を先にしちゃってあげるね……」

「んにゅうああうっ……あ、赤ちゃん、こ、壊さないでえ……んにゅうあうっ♡」

「大丈夫だつて……だつて、こっちに挿れるから」

そうしてお兄様は、姉さんのアヌスに……ペニスを埋没させるのです。

「んにゅうああああうっ♡ ら、らめえっ♡ らめえっ♡ あ、穴あ……け、ケツ穴あっ♡ ら、らめえっ♡」

「さすが……さつきまで犯されていただけあつて、柔らかくなつて……気持ちいいよ」

「んにゅうあうっ♡ だ、だめえっ♡ お、おし、お尻い、穴あっ♡ 穴あっ♡ こ、こんなに……お、おっきいのお……に、にいにいのお……すっごいのおっ♡」

「うふふ……姉さんも、やつぱりお尻感じるのね……私たちい、やつぱり双子なのねえ」

「んにゅうあうっ♡ そ、そんなのお……か、感心しないでえ♡ んにゅうああああうっ……ち、チンポおおっ♡ チンポもおっ……んにゅうああうっ♡」

私は姉さんのチンポを思いつき刺激しました。だつてえ……びっくんびっくん震えて、いっぱいいっぱい先走り汁出しているんですもの♡

そんな状態で、黙って見ているの……ちよつとナンセンスです。

だから、思いつきしゃぶりました。歯だつて立て……ゴリゴリ噛み締めたりしちゃって、姉さんが興奮して、声を出すのがとっても気持ちいいです。

「んにゅうああうっ……ひ、酷いよおっ♡ ち、チンポおっ……も、もげちゃうよおっ♡」

「ふふふ……美奈斗の方を気持ちよくしてあげないからだよ……ケツ穴を舐めながらチンポを手扱きしてご覧」

「お、おに、お兄様あつ！ んにゅうあああおおおおっ♡ ら、らめえっ！ んにゅういっ……ね、姉さん……だ、だめえっ♡」

「美奈斗ちゃんだつてえ……ダメつてえ……言ったのに……止めてくれなかつたじゃないっ♡」

「んちゅう……お尻い、ユルユル♡ チンポお、いっぱい挿れられて……パンパンされたんだあ♡」

姉さんの指が私の直腸の中でグリグリと掻き回されていきます。

でも、姉さんの動きはすぐに鈍くなります。何故なら……姉さんはお兄様にも犯されているから。

「んにゅうああうっ♡ み、み、美奈斗お……ちゃんっ♡ もお……お、おね、お姉ちゃん……が、我慢……できないよおっ♡」

「どうしたいのお……姉さんはあ♡」

「お、お腹あ……赤ちゃん、いるからあ♡ お、おま、オマンコハメえ……で、できないけれどおっ♡ え、エッチい……し、したいよおっ♡」

「要するに、姉さんがしたいのは……これよね♡」

私は自分の勃起したチンポを姉さんのチンポに押しつけました。

この間まで、絶対に慣れないと思っていたのに、今では、このエッチが大好きです。

チンポ同士のエッチい……んああうっ♡ ゴリユゴリユツてえ……き、き、気持ち……いいよおっ♡

「んにゅうああうっ♡ そ、それえ……それえっ♡ それだよおっ♡ んにゅうあああうっ……い、いよおっ♡ い、いよおっ♡ ち、チンポおっ……い、いよおっ♡」

「ふふふ……すっかり、ふたりともチンポ快楽が好きになつたみたいだな」

「あうっ……お、お兄様あ♡ だ、だつてえ……どぴゅうつてえ、出るとお……す、すっごいんですうっ♡ 腰い、抜けるみたいにい、気持ちよく



「え……」  
「んんにゃあ……美奈斗ちゃんのお、ドックンドックンしてるの……分かるよお♥ 興奮……してるんだよねえっ♥」  
「そうですねっ♥」  
「お兄様に見られながら、ね、姉さんとお……チンポエッチいしてるの、み、見られるの……す、好きいいっ♥」

男の子たちに陵辱され切ったメスチンポは完全に剥けてしまい、いきなり裏筋や包皮の裏側で、ゴリユゴリユ合うことになっていきます。  
あれだけ責め立てられたのに、新しい先走り汁は激しく吹き出し、私と姉さんの性行為の大切なローションになって、楽しませてくれます。

「んんにゃああうっ♥ ち、ち、チンポお……チンポお……いいよおっ♥」  
「わ、私も……す、好きいい♥ ね、姉さんの方が……感じてみたいっ♥ やっぱいい……穴ハメされちゃつてるとお……感じるの？」  
「うんっ♥ うんっ♥ か、かん、感じる……いいよおっ♥ ち、チンポにい、ひ、響くよおっ♥」  
「うんっ♥ 羨ましいなあ……お兄様あ、姉さんが終わったら……わ、私もお、同じのお、し、したいですっ♥」  
「あはは……双子だもんね。美奈のケツ穴もだんだん美奈斗みたいに濡れるようになってきたよ。このままだと、オムツプレイでお漏らしとか、オムツ内射精とか……美奈斗がどんな恥ずかしいことしているのか、教えられそうだよ」

「やあ……そ、そんなのお、は、恥ずかしい。だ、だめえ……あ、ああいうのお……私とだけえ……して欲しいですっ♥」

「それどころか……美奈にもアナルフィストとかできそうだよな。そうなつたら、ふたりとも俺の手でケツ穴イカせながら、チンポで愛し合うっていうこともできるぜ」  
「んにゃあああ……だ、だめえっ……お、おし、お尻い……こ、こわ、壊れちゃうっ♥」  
「わ、私も……い、幾らあ、こ、こなれてるからってえ……そ、そ、そんなのお……た、耐えられませんっ♥」

でも、姉さんも、私も、熱っぽい視線の向こうでは、そうなつてしまった時を想像する。  
直腸内を指で、掻き回され、腸壁さえ驚掴みにされるようなハードプレイ。  
同じ目に遭っている双子の姉。  
射精のように吐き出される先走り汁。  
ヌルヌルになった包皮を、互いのチンポだけで剥き合い、ついには射精に至る。  
それでも、お兄様は満足せず、手をお尻の中ねじ込んで、出し入れし始める。  
私も……姉さんも……狂ったように、声を出し、絶頂失禁しながら、再びチンポを押しつけ合う。

「んにゃあう……あううっ♥」  
「くうんっ……んふうっ……んふうっ♥」  
「ふふふ……ふたりとも、そんなに興奮して、もお、互いにやってみたいっと思ってるのかな？」  
「そ……そんなことお……」  
「な、無いですっ♥」

言葉に力はない。  
お兄様の動きは速かった。

「んじゃ、予行しちゃうかなあ……ふたりの希望を受けてさ」  
「んにゃああううっ……だ、だめえっ♥ あ、あか、赤ちゃん……赤ちゃんいるの……こ、こんなあ……へ、変態さんなのおっ♥」  
「だ、だめえっ♥ お、おに、お兄様あつ……い、今、今、ほ、ほじられたらあつ……す、すぐに、すぐに……イッちゃいますううっ♥」  
「じゃ、最初の一回だからね……まだ、俺とのセックスはしてないからさ……これは、俺のワガママ」

そうして、お兄様は私たちを抱き寄せて……お尻に指を、手を這わせました。  
私も、姉さんも、互いの熱っぽい視線を感じ、乳房を、乳首を重ね、チンポを押し付け合い、そして……唇を重ねました。  
私も姉さんも、後悔していません。  
自分の愛している人に、愛されるようにして、その結果がこれなのです……何も文句は言えませんが、惜しむらくは……私たちの心がそんなに強

くないことと、私たちのお腹の中にいる子供には、絶対に理解できないこと。それが残念でなりません。  
でも、それでいいのです。  
お兄様を愛しているのは……私と姉さんだけでいいのですから。  
だから、生殖の伴わない、神への冒瀆的なセックスが好きなのだと……私は思ったのです。  
子供が女の子だったら、きつとお兄様を取られる。子供が男の子だったら、きつとお兄様を捨てる。そんな恐怖もあったから……でも、今は、そしてこれからも、関係ないでしょう。  
何故なら……今、私は、双子の姉と共に、最高のセックスの最中にいるのですから。  
私の思いが姉さんと同じかどうかは分かりませんが、でも、お兄様の指三本が挿入され、ゴリゴリと扱かれた瞬間、私たちは同時に絶頂しました。  
激しい精液の奔流に、私も姉さんもキスしたまま声を漏らし、互いに歓喜のハーパーを漏らしていたので……きつと同じだと思えます。  
このほしくない、この最低な、この忌まわしい……想いも、ふたりだったら受け止められると、私は確信して、更なる絶頂を迎えたのでした。

【end】

こんにちわ。武藤礼恵です。

今回も XANADU の作品『シス×みこ』の外伝的を書きました。

夏コミの後、どうしようかなあ、と迷っているとやっぱり書いて！ というファンの声が聞こえてきたので、書きました。

うーん……でも、苦労した。正直、この命題は難しかった。

ただ、書くのは簡単だけれど、前のアレを含めて何かオチを考えないと……ということで、まあ、こんな風になりました。

もう少し勉強したいです、はい。

来年も早い内からゲームの仕事で大変ですが、何とか上半期に2本は出したい所です。下半期にはそうねー大作とかやりたいよねー。

ということで、皆さん今後とも応援宜しくお願いいたします。

次回は、出し忘れが無く、かつ受かっていればキャッスル、1月サンクリは申込みを忘れたので……うーむ。

では、また次回。

■ おくづけ ■

発行：楓のはらわた

著者：YUKIRIN & 武藤礼恵

2005 年 12 月 30 日発行

印刷：ニモ印刷工房

■ 連絡 ■

[muto\\_rei@ro.bekkoame.ne.jp](mailto:muto_rei@ro.bekkoame.ne.jp)

<http://www.kaede-no-harawata.com/>

code:sheseemikosis